WASON
HQ
1104
J94+

July 1903
no. 517

明治三十六年七月十日

女學雜誌

第五百十七號

明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第五百十七號目次

◎社說

自由、平等、博愛の三標語

「國家の爲」虛僞の辯

大政一發の感(附、勝安房維新の建白)

女學冒頭の輕斷者

◎隨感

◎巖頭の感◎戰には戰死者ある也◎滊車走らず

◎若王寺山上雨後の景◎筆道◎神秘默契

◎女學

◎古の女學◎理想の男子(二)、婦人連)◎女子の中等教育程度に於るの研究(山形東根)

◎光瀾之觀

花觀の釋並に迢樓の譯◎英文隨感◎記錄

◎雜錄

近親結婚有害の哲理……青柳有美

年少哲學者を弔ふ……西內天行

白百合……左琴女史

琴城先生を挽す……

◎寄書

女子實學園開設の主意

立志餘りありて學資の給するものなき書生ほど、いぢらしきはあらず。不肖女學に從事してより此の方、斯る健氣なる女生に感動し、人生の不如意に歎じて、心密かに涙にむせびたると、幾度ぞや。但だ此同情の淺きにあらず、偏えに手段の乏しきを憂ひ、只唯些少の補助を供して、僅かに急を救ふのみに過ぎざりし、今や、時運大に轉じ、女藝其の類を增し、之が爲めに、自活苦學の途を供へんと稍や容易くなれり。方に、年來の所志初て伸ぶべきの秋なり。則ち、玆に、女子實學園を開設し、斯る女生の族にして而も精神の最も確實なる學才の必らず有望なるものを容れ、之が自營勉學の爲に扶助し、立志自助の念を極めて篤くして講讀修養の途なきに困苦せる可憐の徒をして、玆に些さか委倚するの所を得せしめんと欲す。然りと雖も、是豈に獨力の能く堪ゆる所ならんや、況とに天下仁心ある諸君子の惠同合和によりて、初めて遂ぐべき也。不肖密かに感激し、殊に、且つ、彼等が成業の後、立身の途の廣く且つ速に開達せんを懇望して、彼等に同情を惠興せらるべき仁人を、初より廣く多方面に需むるの情、就中切なり。此を以て、朝野を問はず、教宗を別たず、特に專ばら、同情を普ねきに求めて、贊助を四方に乞へり。冀くは、天下仁心の諸君、惠然として慈腸を垂れ、審かに本園開設の主旨を吟味して、篤く義捐仁助を寄せ玉はんことを、謹んで懇請す。

明治三十五年六月

嚴本善治

要綱四則

一 本園先づ寄宿舍を設置し自活勉學の志ある女生に就き審査の後入舍せしめ之に自活の方法を與へ且つ勉學の途に就かしむ

二 本園に入舍することを許すは可成高等小學卒業以上の學力あるものとす

三 假令ひ高等小學校卒業の學力なきもの又は一の學校に就學せしむる便方なきものと雖も篤志方正の女生が爲には成可く自活の途を開き園外に於て寄託するを得せしむるの便を工夫すべし之を本園附屬の事業とす故に本園は初より廣く各方面の同情を乞ひて此等希望者の爲に其途を開かんことを祈るの情太はだ切なり

四 本園は別に奬學並に貸資の仕組を設置し尤も有望なる女生の爲に自由に勉學するの方を得せしむることを希望すること亦切なり是れ本園將來の發達に於て特に期する所の一也。

女子實學園規定要領

一 入園希望者は本人自筆の履歴書、志望書(修學の目的、將來の方針、理想等を記述したるもの)、健康の證明書及び信用ある人の推薦狀等を差し出す可し。

二 最初三ヶ月間を假入園の期とし、其後在園の許否を決定す。但し右三ヶ月間は實費の半額として毎月金參圓及び小使ひ(雜費)を自辨す可し。

三 各生修學の方法は其執務及び學力の如何を計りて、各自適宜に園長之を定むるものとす。

四 執務の方法は各生の長所に隨ひ、適宜に之を賦課す可し。

五 通信照會はすべて返信用の郵券を送附す可し

明治三十五年十月

東京巣鴨村明治女學校內

女子實學園

電話番町一〇〇一番

期日	前金		廣告料		送金
毎月二回(十日、二十五日)發行す	壹冊定價	拾錢	一行(十七字詰)一回	前金拾錢	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は惣べて一割增にて計算せられたし
	半年分前金	壹圓拾錢	一段 同	三圓半	
	一年分同	貳圓	一頁(三段) 同	九圓	
	代金は惣して前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は惣て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ眞に不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候				

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第五百拾七號

明治三十六年七月十日發兌

社說

自由、平等、博愛の三標語

名を同ふして實を異にするものあり、實を同ふして名を異にするものあり。名は實の賓なれども、此の客時に隨つて裝ほひを變ゆ。人の屢ば見て別人と爲す所以のもの、之が爲めなり。故に、古人は曰へり、名の名とすべきは、常名にあらずと。

然らば則はち、今にして、自由、平等、博愛と名けて、人の感覺する所以のもの、果して其の先人が當年に於て感激したる所以のものと相同じきや否やを知る可らず。漫に、經歷に依りて現在を臆測する時は、誤まらざること尠なし。

自由。今人、自由を欲する乎。凡そ、人の自由を欲するは、他に之が自由を壓制する者ある時、もしくは、理想激昂して其の自由境に飛躍することを得ざるを自覺する時にあり。然るに、當今の世、上には壓制を與ふるほどの猛力者絶えて存せず、下には國民が政的に夢想すらん理想、全たく枯れたり。今にして、國民が政治上に於る、自由を熱望する所以のもの、殆んど在ることなし。

人の平等を望む所以亦之に似たり。見よ、今人豈に平等を望まんや、反つて爵位勳等を望む。其の望まざるが如き者は、敢て望まざるにあらず、望んで而して得ざるべきが故に少らく之を望まざるのみ。渠が胸中に手指動く、招いて之を受けんことを欲する也、何ぞ眞とに平等の福音を識んや。

博愛の説を以て、今人に臨む。之を法壇の金戒としては可し、之を提さげて、政綱の一と爲さんとするに至ては、寧ろ滑稽に屬す。凡そ、博愛の名を以て政海に轟ろかすは、有司豪族の慘逆なる時にあり。而して、今人の能く慘逆なるものは少なし。彼等は醉歌踏舞するのみ。彼等は肺を疾んで氣息喘々

なるのみ。彼等は枕らして耽り、竊かに貪ぼり、只だ竊盜の如く、スリの如く、喪家の犬の如くして、うろつくのみ。彼等に何の猛的慘酷かあらん。左らば、國民叫呼して、博愛を以てし、其の旗幟の下に炎々烈火を掲げべきほどの敵あるを見ざるに非ずや。

果して然らば、自由、平等、博愛と云ふ。もし之を以て今人の精心に說法するものとせば、極めて適切なるを覺ゆれども、之を掲げて以て大いに激動せんとする時は、乏如として欠けたるを感ず。夫れ之に說くとの極めて適切なる所以は、之によりて激するとの正に不可なる所以なり。他なし、吾に無きが故に求めざる可らざるものは、翻へつて彼に責めて之を要むると能はざれば也。

此に於てか知る、今にして、法界に、自由、平等、博愛を敎ゆるものあらば、人肅然として耳を傾むけん。もし之を政海に於て風針となすものあらば、微小の波濤をも揚ぐると能はざるべし。

不說之說、花應レ解レ語。
不聞之聞、人已傳レ心。

二

「國家の爲」虛僞の辯

『國家の爲』と云へる一語は、沒理解の威嚴を存す。人之を聞けば、忽ち莊高に感じ、人之が爲めに動けば、直ちに殊勝に聞こゆ。故に、志士は此の名に於て感奮し、賢母は此の名に於て敎訓す。今や『國家の爲』と云へる一語は、神聖犯す可らざる絕對となれり。

然りと雖ども、冷靜に思慮するものは、此の一語の酷はだしく荼毒を流すとを觀る也。今にして、其の秘密を表明し、審びらかに弊源の兆す所ろを露はさずば、爲めに誤まらるるもの彌よ多からんとす。

試ろみに問へ。國家の爲とは、何の意義ぞや。人素より對へて曰はん。吾等臣民が國家となす斯の日本帝國の爲に計るもの、これ也と。

然らば、又更に問へ。此の日本帝國の爲に計ると云ふものは抑そも、何事ぞ。帝國の爲に計る事や、其類擧るに盡きがたく、算ふるに止めがたし、抑そも幾十幾百かある。其の計るべ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

き事々を惣稱して、漫に「國家の爲」と號し、而して、其の漫に號けたる所云ゆる國家の爲なるもの丶爲めに、實に能く献牲し得ると云ふ乎。是れ寧ろ虚僞に非ずや。

夫れ、他の公心公義を賛賞して、之れ眞とに國家の爲なりと言ふは可し。如何んとなれば、之れ國家の爲に利を爲したるものなれば也。左れど、當局の人其人自から國家の爲に盡すと云ふものあらば、之れ大率ね不可なり。如何んとなれば、之れ虚僞なれば也。何故に虚僞と云ふ。人は漠然たる國家と云へるものの爲めに身命を献ずることを能はざる故也。

昔しは、君主を以て國家としたりき。當年の人、國家の爲に死すと云ふものは、實は君主の爲に死したる也。此際、人情の眞を寄すべきあり、精神の氣を交ゆべきなり、眞に所云ゆる國家の爲に死することを得たる也。之れ虚僞に非ず。

今の所云ゆる『國家の爲』にするものは、之と異なる。渠、其情を動かすべき的確の具躰者あるに非ず。之に生命を與へて惜しむを覺えしめざる感激あるに非ず。只徒らに唱し、空しく叫んで、以て誇張虚榮の義名に利用す。今の自から國家の爲と號するものは、眞摯の人に非る也。

凡そ、人の至誠は、已を得ざる所ろに動く。其動く時、自から敢てするに非ず、別に爲にする所あるに非ず、只だ衷情の激する、眞に禁じがたきものありて則はち活動せる耳。此の際、豈に『國家の爲』もしくは『帝國の爲』と感覺すべき餘地あらんや。此の餘地あらば則はち既に至誠にはあらざる也。匹夫の兒逆殺せらる、之が爲に戰を起すものあり。不當忍ぶ可らざるの重税を課せらる、之が爲に劍を拔くものあり。此際、至誠の激する時、間、髮を容れず。何んぞ生平無事の間只徒らに國家の爲と號して、一死を奉ずるの赤心を呼び來ることを得んや。

故に、敎ゆるもの、其子弟に曰つて『國家の爲に』せよと云はゞ、是れ虚僞を敎ゆる也。何んぞ、直ちに、人の爲に、友の爲に、孝悌の爲に死せよとは言はざる。

今や、自から爲す所を自から賛して、之れ「國家の爲に」する也と言ひて、密かに得々たるものあり。之れ實に笑止千萬の事にして、自から其の誠ならざることを自白する也。

今や又、國家の爲に〳〵と言ひて子弟を敎育し、以て甚はだしく得意とする先生輩あり。之れ實に、至誠涵養の修練に幼

稚なるものにして、識者の憫笑を買ふを思はず、窃かに可憐に堪へざる也。

嗚呼、「國家の爲」なる一語よ。汝、其の美名を濫用せられ、僞はりの人と、誠なき人と、俗輩と、製造的愛國者とに玩弄せらる。汝、速かに其名を沒し、其語を消し、廣く世間に汝を呼ぶものなからしめよ。而して后ち初めて、眞に汝が國家の爲となるべき實果を生じ來らん也。

大政一發の感

薩長、幕府を伐ち、幕人屈す。薩長、政に丁り、幕人屈せず。天下亦た擾々たり。此は是れ、明治二年の六月、新政頓挫し、人心甚はだ萎靡せる時、勝海舟先生の献白せし所ろ也。其事舊くして、其文新たなり。其言古の爲にして、其意、亦た當世に用あり。掲げて、一鍼となす。

今哉太政御一新の際に候へども、未だ全く鎖國の陋習をば去らせられず、其たゞなかと存候。其子細を申さば、凡國の兩間は、平と戰とを申さず、一張一弛彼我の情體を明察し、其攻守の法を明にし、宇内の形勢を洞察し、以て我が國勢變遷せしむるの基を固く成すを以て急務とは存候なれ。然るに、下民上を信ぜず、外國の者等、諸港に居て是が籠絡たえず、人氣萎靡して、唯其言責に苦しむが如きは、譬へば一城に立て籠りて、内應反間に疑惑し、撃て出づべきの勢なきがごとくにて候。當今の形勢を申候へば、皇國を一城とし、三千餘萬の人種此國内に籠居して、全洲相疑相嫉妬し、小是を咎めて國外に强敵あるを知らざるが如き歟。是を攻守を明し、彼我を詳にせりとは申すべからず、誠に籠城の困兵の屬とや申さむ。故に此萎靡せし人氣を以て鎖國の陋習とは申候哉。今哉諸局盛大の御世話あるに似たれども、國内の大算を詳にせざるがゆゑに、其御用途行詰り、楮幣を以て一時の究を助けられんとすれども、いまだ上の御信義立たざるを以て、下民恐れ疑ひ、外國其不便を唱へ、亦惡貨引替の事起れりとこそ承はれ。先々年幕府洋銀引替の爲に巨萬を失ひ、其用途に苦しめると、唯五十步百步の違とは存候。たとへ正金銀を以て貨幣造り出させむも、國民信じて漸く一致に向ふにあらざれば、如何ぞ外國の士民の爲に、國財を失ひ國内困迫に到る

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

を遁れ給はんや。臣が主家終に國をして盛大强勢に成す能はず、外國の所置によからざりしを悔、かへり見、深く恐れおもふの余り、愼み戒しめて今日に及べり。世間は深意を察せず、小臣數萬其餓渴を恨らみ、しきりに怨恨する者多しといへども、吾主誠意を以て動かざるゆゑか、いまだみだりに亂爭の事も聞へはべらず、上者是を察し給はずとも、我輩いまだ申さむ詞あらむ哉。空々皇天昭々、百年にして其議定るを俟たむ而已。凡富國强兵の基は、國民上を信ずるを申歟。下民上を疑ふ時は、全國の基本固からず、是其因て來たる所、上は卓識なく規模狹小なるを以て、上意下に貫徹せず、實數大より出ざるを以て、下民上意を推知し、詐謀行はれ易く候と存候。豈空敷利器と貨幣の多きを以て、富國强兵の基と申さん哉。あゝ我が邦內、いづれか日本の民ならざる。饑渴して死するあり、恨みて死するあり、是を信じ彼を憎む、愛憎私執に陷て、公を失ふが如し。此ゆゑに、內整はず、上を信せず、萎靡して小是非に得失し、各持用の勢を張、何れの日かまた國勢之進步を仰がむ。方今の急務、國を辱めず、民を富するにある歟。政府獨富めりとも、また如何せん、遠く月氏の破たる、近く支那の內亂、皆國內の窮迫に初まれり。如何ぞ獨り東洋諸邦に遠大の眼光なく候哉。

舊官吏佛郎西の官吏を偏信し、國財を失ひ、醜を傳へ申たり。其上又英人之憤を懷けり。今日また一邦を偏信し給はじ、また前事の戒に戻り給はむ歟。舊は幕府を罵る外國人甚だ多かりしに、今は朝臣を罵る者多しと承はる。是其因あるにあらず、人情皆如斯。外國の交際に到りては、尤正々堂々、誠實に出されば、甚危ふく候。全國の力を一致し、たれに對すとも、猶足らざるを愁ふ。況哉、小民上を信ぜず、上下疲弊す、上下眞に一致との實政なき時は、危きを知るべきのみ。何ぞまた我が微賤の論を待可申哉。

政府の正府なるを文明諸邦と申が如き歟。文明諸邦といはれざる限りは、其政府公私混交して、知らず不知其政私にながれ安く候が、利權を異にして下を苦しめ、私執を以て人を擧げ、强勢をかりて順を下たす等、是を公と可申哉。此事共は誰も能々存知たる事ながら、其實跡なきは、未た眞知にあらざるを知るに足れり。唯其謗議を恐れて、虛飾を旨とし、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

令告を公明にして、口を塞し候、いはゆる東洋諸邦の習歟。このゆへに、文明諸邦に手を措くゆへんの基歟。在上の賢臣厚く御意を注かれむ事こそ、邦人の千萬願ひ思ふ所に候なれ。天下之大事者、良策を問ふにあらず、衆議にあらず、唯其任用人を得るに候歟。任用して不疑其力を伸ばさしむ、若其人を得たりといへども、臂を引き機を忌むに於ては、かつて其人常人に不過と存候。昔楠氏の笠置に到れる、已一人天下の大任に任じて、謙遜の言なし、又良策を献ぜしにあらず、終に纔の卒を以て、關東數萬に對し、大義を天下に唱へたりと承り候。其後、還幸に及候ては、官軍大衆、往日の比にあらず、英士雲集、良策善謀百出に及候ても、末は寥々として蒙塵の御事に及候ひき。此際、楠氏に劣れるに非ず、傍議鼎沸、所謂臂を引きて其機を失し、都て他將に其優劣を比するは如何に候哉。事は昔に似ざれども、傍議空論忌機の如きに到候ては、千古一轍、人情豈往時に異なりと可申候半哉。在上の御方々、宜敷御注意の要成るべき處歟。凡其論高くして其事業なきは、東洋の陋習に候歟。往時米國渡來の折は、一驚して議論少なく候ひき。其後開鎖の論興りて、喋々七八年、其孰歟是なるを知らず。昔天草の一揆にこりて、外國の通商を禁ぜしに、いまだ開鎖の議ありしを聞かず、此時哉侯伯よりして諸士、戰國を去る遠からず、出て擊の氣力衰へず、我が國家の害を慮かりて、かつて通商をとめたりと承はる而已。其識もまた想像するに堪へたり、豈開鎖の文字に膠泥して、是非得失兩ながら其全を得ざると同日の談に候半哉。今哉、封建郡縣の議あり、我國侯伯四方に在る、必ず封建の別に意あつて然るにあらず、戰國の勢、因循して成れる而已、また是を眞の封建と申候哉。其今日の姿あるは、後世裝飾せし而已。今にして其護國に害ある、よろしく其別を改めむに、何の害をか生ぜむ。嗚呼邦人、生國に報ずるを知らず、字儀と目前に泥みて、謗議百出す、易きを以て難しとし、近きを以て遠とす、徒に支那習に陷て、事業は萎靡す、是小臣愚昧の解せざる所に候。昔福島正則、藝州を除せらるゝに當て、時勢を洞察し、是を捨る舊鞋のごとし、其臣下も亦順々として去る、此時哉いまだ外國今日の如くに候はず、其勢の然るべからず、一戰の無用にして、輕擧盲動の益無きを明察せし成る歟。正則は一武夫にして、尚

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

其識此如くに候、今哉海外の船舶往來して、虚日なし。我が邦人、たれか是を顧みざらむ。表に献國を唱へて、内心恐れを懐くか如きは、何ぞ其陋にして劣り候事をや。

大是は世人是非する能はず、大手段は世人目して拙とし可申候、爰を以て、事業に施すべく候歟。其知術を以て相是非和得失せる者出る歟、其實は、是等大手段中の小目にして皆其範圍内のものにて候。那氏の歐羅を壓せし、華聖氏米國を獨立せしめたる、其後議益精しく、知益開けたりといへ共、皆兩氏の範圍内の事にして、其上に出づる事能はざるべく候。況哉、今我國、萎靡せし人氣なるを以て、其事業は麁にして大成るべく候、遠大を亂すといへども巧智をいでず、小目を見て、大節を失ふに及可申歟。

今世大業は成し易く候歟、世人謗議沸々たれども、大抵皆其小圈内に是非得失して、かつて圈外を見る者なし。是を以て其成し安く、成がたからざるを推知す。たとへ傍議百出、盲動すとも、意義誠大欺かざるを以て、是等を包羅せんに、如何ぞ難きあらむ哉。若誤て術數を用ひは、破れて亂麻の如く成るに到るべく候。」

女學子曰く、嗚呼誰か大鼎を以て兒戲に委す。邦家の事、眞に危急にあらずや。苟くも身を挺して之に任ぜんとする者は、先づ實行躬踐して、天の大難を下すに從がはずんばある可らず。かの自から惜む者、遂に刻下に用なし。

女學冒頭の輕斷者

今の女子教育者たらんもの、もし眞とに謙德あらば、誰か其の不知不案内に當惑して、自から知るもの尠なきに自由せざるを得ん。其の研究は初新なり、其の經驗は淺小なり。依て參考の料とすべき海外の事は、茫として捉らへがたし。顧りみて比較すべき舊時代の事は、漠として明らかならず。今初めて未開地に入り、直ちに荊棘を啟いて、新路を作らんとするもの、實に今の女子教育者の現狀にあらずや。

果して然らば、演繹歸納を忽諸にせず、廣く尋ね、精かに究めて、而して後ち一事一理の斷定に達すべきこそ、當然の覺悟あるに、其の入門の初めに當つて、忽ち一大斷定を速了し、以て其の前程幾千萬の研究を適誠すべき初一義を輕々に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

決定す、是れ甚はだしき妄斷にあらずや。

何をか妄斷と云ふ。曰く、女は到底、男に劣るべきものと斷定するを、即はち是れ也。

是れ將た、何の研究によつて決定したる、此の決定の是非如何ん、抑そも古今の一大問題なり。諸公、幾十年の研究を經て而して後ち和當の決定を爲すとせば、是れ或ひは可なり。然るに、諸公は自から告白して、女學に未經驗なりと云ひ、之より初めて、其門に入ると稱して而して忽まち冒頭第一に此の決定を速了す。之れ豈に亂人の事にあらずや。

且つ夫れ、男女優劣の事を論ずる、之を生理もしくは人種の疑題としては、固より價値あり、然れども、教育者が、人を教育するに於ては、何の關はりもなきと也。彼たとい劣者なりとも其の劣の何所に於て止まるべきかを知らず、誰か劣の程度を知らんや。人を教育するものは、其人の尤とも高く、尤とも多く達すべき所ろに達せしめざる可らず。此の際何の必要あつて、劣の一事を言ふ。夫れ、人は皆な神よりも劣れり、然れども、神よりも劣れるの故を以て、人の教育に際限を置かざるものは、たとひよし、女性をして男性よりも劣れるものならしむとも、之が爲に其の教育に區劃制限を置くべからず、之れ教育者の心術にあらずや。

凡そ、道を修むるものは、至高至玄に到達すべし、初めより劣敗屈撓を容認すべからず、堯何人ぞ、舜何人ぞ。人皆な之に達するを、得べしと信じて、而して後ち百里の半ばを行く。未だ聞かず、初めより其の劣敗者たるとを自覺せしむるとの、人の教導に善用あるとを。

嗚呼、今の女子教育者が、輕々しく男尊女卑論を唱導するは、其の何の心たるを知らず。諸公旣に人間研究の卒業者たる乎。抑そも亦た、人性自由發展の恐怖者たる乎。

隨感

○巖頭の感

華嚴、般若、方等。夫れ〳〵瀑布の美あり。古人これに觀じて聖經の趣むきを示せしに、今や一靑年、迷執に追はれて此所に來り、萬丈落下の偉に打れて、恍惚として忘る。則はち樹皮を削りて巖頭の感を書する時や、旣に昨の我にはあらざ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りし也。斯の如くして復た眺め、飛瀑千仭の莊烈に感ず。斯の如くして亦眺め、鼕々奈落の音に聞く。斯の如くして又眺め、水走らず、我起たず、飛ばず、死せず、生きざるの無我に入る。彼や斯の如くして水に投ぜり、亦何の死と何の煩悶とあらんや。西行、歌つて曰く、願はくは花の下にて春死なん、其きさらぎの望月のころと。蓋し、懷疑は、學生の藤村なり。其死は、美の操君なり。此に別人あつて存す、論者妄りに拘々として理解するヿ莫れ。

○戰には戰死者ある也

煩悶は、新生命の發芽に伴なへる熱の如く、懷疑は、旭日の上らん前の夜に似たり。これあるを以て、直ちに悲しとする莫れ。見よ、戰は、平和の爲に戰かふものなれば、之に打死するものは、義の爲の死者なり。後の平和に功勳ありとして、慰さめずんばある可らず。懷疑、煩悶の中ばに身を殺すものある、惜しむべきは勿論なれど、人心平和の克復に戰死せしものとして、些さか慰さむるを要す。但だ徒らに繰言せんは、死者の志にあらず。又遺族の務めにもあらじ。

○滊車走らず

旅を急ぐ人、急行の滊車に乘りて走らす時、或る停車場にて進行を止めたるヿあり。何事かの起りしならめ、驛長、令を與へず、車長、偏えに待つ。此時、旅客思ひ〳〵に室を出でて、散歩する爲體、長閑けさ言はん方なし。天晴れ氣麗らかにして、征人、行を急ぐを忘る。役吏亦ま荷物を運び了へ、相撲などして戲ぶる。車上車外、時の遷るを覺えず。此時いと忙がはしきは、滊關車の黒煙にて、烟突、墨を吹き、風に激して音あり。嗚呼、この好畫題。畫人之を寫さば、余は題して「忙中有ㇾ閑」と言はん。

○若王寺山上雨後の景

昔し法然上人淨土の一門を道破し、熊谷直實、髮を斷つて蓮生坊となる。此の由緒ある黒谷の寺内にて送葬の式を擧たる時、導師莊嚴に經を誦らんじ、知友親しく弔らい文を讀まるる頃ほひ、東山雲俄かに早く、迅雷、西方より轟ろき、雨沛然として降る。少らくして、雷聲太はだ急、雷鳴いよ〳〵高く、雨尤とも烈し。式終るに近く、燒香の煙、濕風に消んと

する時、雨陣尤とも酷、破煙地を播いて上る。いつ晴れべくとも見えざりければ、吾等會葬の人に請ひて固たく謝絕し、兄弟唯二人、柩を山上に送らんと言ひ張る。則はち、草鞋を着けて、棺の後へに列び、一種異樣の快感を懷きて、雨中、山門を出づ。然るに奇なり、山門を出るや、雨忽まち熄み、一天俄然として拭はれ、夕陽、斜めに輝やきて、水の細流に囁めくを照らす。われ弟に言つて曰く、是れ先靈の望む所ろ歟と。則はち彌よ感謝あり、足を躍らせて、若王寺山上に登る。此時、田園尙ほ日光あれども、山中既に暗し。第一列に高張二丁を建たるもの、其の白張の大燈に火を點じ、枝交はつて水滴たる森の下陰を上るに、綠陰更に蒼く、高張いよいよ白く、中に燈火の心細くまぢろぐを見る。續いて、棺を負へるもの、皆な六尺、麻服長袖、風に飜つて步々轉ず。吾等之を見て、畵境に入り、既に幽明の差別を忘る。上ると八丁、山上に達すれば、洛陽の全景、眸中にあり。市廓、磐の如く、白水其間を流る。嵐山、遙かに對して、今ま雨に洗はれて一入に生綠なり。嗚呼、この光景、先人の之よりして永久に賞觀せらるべき所歟。則はち、大樹の下、小丘自から噴起する所に塋域を定め、萬松矢の如く天を衝く邊りに面せしめて、五輪塔を建まく埋葬す。石棺、蓋せられ、土覆はれ、墓標、櫻の若樹を侶として玆に獨り留まらんとぞ起つ。嗚呼、先人蓋し此の幽邃の地に長眠するを好ませ玉はん。斯て塋域を出て、數步して再たび市景の觀に到れば、電燈、星の如く、白光、赤光、明滅燦爛たり。

○筆　道

先考琴城先生、壽七十、一生の修養は筆道にあり。長年京華に居て、窃かに奈良朝文物の復興に意あり。獨り墨技に任じて慨然として期せられけん、貧、骨に入る時と雖ども、泰然として、習字を止め玉はず。遺愛の法帖四十餘幅、皆な稀有の品にして、中に尤とも珍とすべきあり。別に天下の金石文字を刷蔵せらるゝ千を以て算す、寧ろ愕如たるものありき。嗚呼、一技一道に苦學する亦難い哉。古人歎じて曰く、年長初めて父の遺書を讀むと。我に於ては其の期果して何れの時ぞ。

神秘默契

此は或る時、本郷敎會にて談話したるものを、某子が筆記せられし也。談話は其まゝに流れ吹ひて、自からだに忘却し去るを常とするに、此の文の妙は寧ろ永く存したしと思ふほどなれば、則はち掲載せしむ。

人間の至大なる幸福は、高貴の人物に接して其の敎化を蒙むるに在り。此無上なる快樂を知らざる間こそ、人は情懷の滿足を卑俗の快樂に托すれども、譬はゞ是れ鏡花水月の類にして、一迷轉じ去れば忽ち孤心の空虛を感じ、更に他の行樂を求むるに至る。人若し當初より至高の快樂を知らば如何でか遽然として之に歸向せざるべき。只此快樂や悟り難く捉へ難く、凡俗の心を以ては中々に悟了し得ざる故に、人間本心の趨く所、多くは此境に達する能はず、空しく卑賤の行樂に依つて心身の滿足を求むるのみ。宛ら彼の亭々雲を凌ぐべき青松の止むなき障礙に隔てられて地上に匍匐ふに似たる可し。いかに無學の輩なりとも、一度法界の靈化を味はゞ、如何んぞ之を棄てゝ他に溺るゝ事あらんや。不幸にして此樂境に達せざるものは、或は之を羈絆と爲し、或は之を義務と觀じ、未だ心理の愉快とするに及ばずして、早くも他の誘惑に迫はるゝ故に、遂に無上淨樂の法界に入ること能はざるなり。されば吾人を導いて此妙境に遊ばしむる師恩の高く尊きこと世に比ふ可き者もあらず。吾人が精進の熱望深きに從ひ感謝の情念自ら禁じ得ざるものは洵に此故を以て也。況んや神の獨子基督の側に在りて、朝夕其敎を受けたりし十二弟子の幸福の至大なる天下何物か之に超ゆるものあらん。予聖書を繙くごとに一念玆に至れば私かに欣羨の情禁へがたき者あるなり。抑も彼等如何なる識德ありて基督の撰び給ふ所となりしか、神學者動もすれば十二の異れる性格を擇び給ひきと說けども、恐らくはさる器械的の撰擇にては非りしならむ。思ふに彼等は皆な琢磨を經ざりし璞石なりしも、切瑳すれば灼々の光輝を放つべき有望の人物に相違なかりしなる可く、主を賣れるユダさへも猶ほ取るべき才能は有てりしならむ。彼等は三年の間主の側に在りしも、猶ほ基督の偉大高尙なる人格と敎訓とを充分感得する能はず、屢々之を誤解して主の御叱を蒙りしことも多かりき。就中吾等の誡となるべきもの二三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

を言はゞ、

第一ペテロ　聖書の零碎なる記事を総合してペテロの風格を想ふに、彼は忠勇義俠負けじ魂に富みたる率直の人物と覺しく、其平生最も親めるは温厚なるヨハ子にして、識量あるポーロとは寧ろ衝突し易き傾向ありき。彼は衆弟子の間にありても高弟を以て自任し、ヨハ子が常に基督に親侍するを見ても猶ほ忌憚する所なかりしは、全く自らを以て任じければ也。されば主と仰ぎし基督の裁判に曳かれ給ふや、彼は悍然肩を聳しつゝ、之に尾して裁判所の入口に在りしに、怪しき哉絶大の威厳を有ち給ふべき基督は、只管に緘黙を守りて匹夫の爲す儘に任かせ給へるなり。迫害に遭うて自ら挺進し水火の中をも恐るまじきペテロは、此有様を見て且つ怪しみ且つ疑ひ、胸中の失望と憤懣とは終に如何ともし難く、婢僕が指して「此人もナザレのイエスと偕に在りし」と言ふや、三度までも知らずと答へたりき。されども一朝耶蘇の復活し給ふを見ては、深く前日の非を思うて痛悔惜かず、胸中の欝悶に堪えずして湖畔に漁りしたりしに基督現れ給ひたり。ペテロ船を出でゝ基督に見えしが基督は嚴乎として傍を顧みて宣はく、「爾是等の者にまさりて予を愛する乎」と。ペテロは涕泣言ふ所を知らず、「予汝を愛すること汝の知るが如し」と答へぬ。抑も初めペテロの基督を觀るや勇氣に富める義俠の神人としたるに似たり。クリストの十字架に上らんとする其晩餐の席に臨みて、弟子の中誰か最もエラキと云ふ問題を言ひ出でしは恐くはペテロと覺ゆ。彼が基督の眞相を誤解し易き一種の性質を有てりしは之を以ても推知し得べし。彼は任俠義勇の美德を以て誤解したり。

第二ユダ　ユダは十二弟子の中にて最も伎倆に富める才物なりき。彼より諸弟子を見るときはペテロは愚直、ヨハ子は温順、ヤコブは學者にして共に語るに足らざりしならむ。彼の巧猾なる、正直一徹のペテロとは常に衝突を避けて寧ろ之を利用せむと試みたりき。されば十二弟子の中に於て會計を掌りしものは實にユダなりき。嘗つて基督が道を婦人に傳へ給へる折に、若きマグダ、マグダレンは辛苦して蓄ひ得たる金を以て馨しき香油を購ひ、基督の御足に濺ぎかけぬ。ユダ之を見て曰へらく、彼の香油を金に代へ之を貧しきものに施さば如何ばかりの功徳ぞやと。基督之を聞き給ひて「貧し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

きものは常に在れども吾れと共に在ることは難し」と教へ給ひたれども、生來事務的の考察をのみ重んじたる頭腦には遂に其意を了得し難かりし也。經綸以外に美しき事業は夥多あれども、ユダの如きは之を面白しとも思はざりき。思ふに若し基督王國を此世に立て給はゞ、予は其大藏大臣たらむとはユダが胸中に期待したる所なるべし。されば彼教理の議論に關して他の諸弟子と何等の衝突も無く、只管來るべき地上の王國をのみ待望したりしに、基督の爲し給ふところは其期する所と異りて、天國は此世に在るにあらず來るべき世界に在りと說き給ふを聞くや、彼の驚きは一方ならざりき。彼の驚きは實に尋常一樣の驚きに非ずして、驚きの餘り更に驚くべき野謀をば立たるなり。野謀とは何ぞや、彼は平地に波を起してまでも基督の情感を刺激し、之に由りて種々の面白き事件を生起せしめ、此世の王國を實現すると共に己が實際的才幹を振はんとは彼がよしなき野謀の眞意なりき。基督を殺すに至らむとは彼の想ひ及ばざりし所にして、只々己が尊崇する基督をして其の主義を一變せしめんとの經綸をば劃したる也。此故にユダの性格は一歩を進むれば奸雄とも呼ばる可し。

併し野謀は遂に仇となりて基督の死に定めらるゝを聞くや、彼は三十余金を擲ちて哀れむ可き縊死を遂げ果てたり。蓋し橄欖山の月夜に基督が最後の祈禱を捧げ給ひし悲痛の光景を、ユダの如き事業經綸の眼より見れば恐らく何等の哀情も起らざりしならん。基督の高大深遠なる天國の垂訓もユダの爲めに誤解せられて、遂に十字架上の大悲劇を現じたる也。

●第三マルタ及マリア　此二人は若うして親を失ひしも美しき家庭を作り居たりしかば、基督も彼らと語るを常に喜び給ひき。此二人は今日の世にも見得べき二種の女性を代表するに似たり。基督の道を說くや、姉のマルタは多く近隣の人々を招ぎ、斡旋の勞怠りなかりしも、妹のマリアは只々基督の聖座に近く參して、恭しく靜耳を傾くるのみ。姉は常識に富める快活の性質、妹は敬虔の至情に篤き天資と覺し。此二性格は屢々婦人の中に見得らる可く、世上には氣の利くことマルタの如く、才幹の點より言へばユダの婦人化したる如き女性もあり。又マリアの如くに男性に例はゞヨハ子若しくは孔子の門の顏回の如き資性を帶ぶる者もあり。而して此マリアの如きは能く宗敎の眞髓を得て深く會悟したるに似たり。さ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れぱこそ基督も「人は多くの事によりて思ひ煩へり、されど善き事は只一つ也、マリアは善き方を撰びたり」とは宣ひたりしなれ。實に人は朝夕事物に心を勞すれども、善事は只一つのみ。所謂道德 宗教上 の神經質は世に好ましからぬ者の一なる可し。

是等男女の弟子が各々の缺點に就きて基督の訓戒を蒙り、琢磨を重ねたりし當時の幸福は、抑も如何ばかり大なりけむ。されど猶ほ使徒各々の性質に從うて、多くの誤解を免れざりしこと斯の如く顯著たるものありし也。且つや人は常に自家の長短を誤るものにして、自得する所は自覺せざる所なるも短所は之を力めむとする故に却つて之を長所と誤認することあり。されば人各々が自家本來の性向を知覺して意象の眞僞を誤ることなく、直ちに靈覺の泉に解れて、法界の精粹を味はむと中々に容易の事ならず。況んや二千年の後に生れて救主の精神を知るの難きは、吾等の豫め覺悟すべきところ、謂義註釋 多少の偏癖ある學說等に頼るのみにては如何ぞ太過なきを保ち得べけむ。吾等は只靈泉の遠きを知つて偏に精進の功を重ぬべきのみ。先般苦學會なるもの起りしが就いて予

聊か感なきに非ず。抑も苦學とは決して資金無くして學を爲すの謂のみにはあらざるなり。人間の才能智識は通例或程度までは進步すれども、一度この限界に到れば進步茲に停滯して、尋常の努力にては最早一歩も前進する能はざるものなり。思ふに此界限は遺傳的能力の盡くる所なるべく、夫以上の進步發展は全く苦學の功果也。昔者達磨の、予大悟三たび、小悟幾回なるを知らず」と言へる。聖書を學ぶに當つては講義註釋の如きも或程度迄は進步の嚮導なる可しと雖、使徒の筆記せざる所、古聖の示さゞる所に至つては、吾と吾が心中に一種の工夫を自得して豁然悟了するあらんのみ。譬はゞ老練の商賈が多年の經驗に由り、社會人心の趨勢を看破して自ら商機の楔子を捉ふる如く、人は苦心苦學の修養に由つて、自ら法界の妙趣に通ずるものある也。監督教會の信仰個條に見る按手禮の如きは、一面より見れば頗る滑稽の觀あれども、眞理は自ら此中に在り。按手禮の敎ゆる眞意義は、獨り監督に向つてのみならず何人にも共通なる悟道の秘訣を示すものならむ。「風は吹けども何處より來るを知らず、聖靈の結ぶ所も亦しかり」。天地の生命は何處より來るを知らず、又何處に去る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を知らず、只脈々たる一種の生氣ありて遠き基督の昔より、滾々として千古の後に傳ふを覺ゆ。之を形式に表して示す所は正に此按手禮也。是禪宗の所謂悟は悟を生みて法統自ら傳ふる所以、此脉統を得る吾人苦學の到達する妙境也。而して「道に進むは他なし祈禱と斷食とに由る」。斷食とは食を斷つ耳の謂に非ず、世慾を絕つて覺悟の域に入るの謂のみ。此公然の秘密はカアライルも既に示せしところ、心海波無く獨り神秘を靜觀して默念默契する所あらば、法統法脈忽焉として吾に傳へ、心身の淨樂忘れんとするも忘る可からず、離れんとするも離る可からざるもの有るべし。而して此妙境や單に學あり文あるものゝみならず、聖人も匹夫も等しく悟入し得べきところ、之を名けて信仰と云ふ。只此神秘は言にし難く筆にし難く、人々之を心に默契すれば即ち不朽の生命となり、之を己に躰現しては即ち事業品行となる。他だ此二者は末にして信仰は根本の泉也。末に流るれば器械的たるを免れざれども、一度此泉源に觸るれば輙ち心境浩然豁達自由にして欣喜止む可からざるものあらむ。予は敢て之を得たりと言はず、只之を得ざれば未だ以て宗教の道奧に到り難しと想ふもの也。

女學

古の女學の粋

◎女子教育なるものは、近頃、初めて起つたもので、昔しは少しも無つた樣に申す人もある。馬鹿々々しい見解である。何時、如何なる世に、親が其の愛娘を教育せぬと云ふ時代があらふや。たとひ、未開野蠻の世なりとも、夫相應の教へと躾とは仕てある。況してや、德川幕府の時代などは、尤とも鄭寧に、甚はだ信切に教育したもので。女子教育は、德川時代に於て極めて盛んなものであつた。

◎但だ其の教育が、今と違ふの故を以て輕蔑する人もあるが之も亦た思はざるの甚はだしきである。教育なるものゝ半面は、時勢に從がふべきもので、時代の要求に適應せねば甲斐なきことである。今の女子教育と相違する所以が即はち昔に適應したる所以で、斯ありてこそ當時の女子教育たることを得たのである。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎尤とも、今の女學に比較して優劣を論ずる時は、長短交もある。中に就き、其の長所を玆に擧て見やう。やゝともすれば、今の女子教育者が之を等閑に附するの僻があるよふに思はれるからである。

◎先づ、昔の女子教育は、献身的教育、精神的教育であつた。彼等に三界家なしと敎へたなど、人の靈性發達には、非常の効力があつたものだ。觀ずれば、一所不定、人皆な家なきものである。狐には穴あり、空の鳥には巣ありとも、人は家なく、席溫たかならざる所ろが、高尙な所である。然るを、大厦高樓を築いて、常住不變の住家と思ひ、金殿玉閣をちりばめて、永刧の安宅と考ふるなど、淺ましき迷ひである。佛も、聖も、老子も、救世主も、皆な此の迷執を拂はせんとて、斷えず金誡を述べられたるヿなるが、人はなか／＼之に聞かぬものである。其中やゝ、之に耳を傾むけ、又耳を傾むけねばならぬ程の勢力となつて敎へたは、女人に對しての女誡であつた。三界家なし。如何に微妙の教訓で、之に聞ける人の如何に高潔でありしかを思はれよ。

◎又三從の敎。これ亦た結構の事である。從、柔、順、などは、人の最上の美德である。武、剛、强などの比では無い。たゞ未開化人が、この武的道德を主張すれども、之とて理想として居るのでは無い、たゞ止むヿを得ず言つて居るのである。つまりは、從の敎を最上と思つて居るのである。然るに昔しの女敎は、之を主として說いた。夫を思ひ違へて、斯ては卑屈になると言ふものがある。此等は論に足らぬ幼稚者の意見であるが、先づ試みに實地に就いて考へて見らるるが宜しい、從の敎を守つた古の女と、獨立と云ふヿを口と文字とで敎へられた今の女と、どちらが卑屈である乎。卑屈とは、腰を屈めるヿを言ふのではない。頭を下るヿを言ふのではない。ハイ／＼と言ふのを直ちに卑屈と云ふのでも無らふ。卑屈とは、則はち義に據らずして委賴し、義に從ふにあらずして屈するのであるが、此の卑屈を卑しみ、美と節とを守りて死する迄に至りたる女が、反つて古の從的女子に多いのは何の譯である乎。又たゞ女計りではない、世に於て尤とも强硬なるものは、敎に於て尤とも從順なる信徒であるヿを考がみたらば、從と卑屈とは全たく別物で、反つて全然相ひ表裏するものであるヿが分るであらふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎先づ此の二ヶ條、三從、無家の二つの教訓は、人の靈性に著ぢるしき覺悟を與へるものであるが、更に有力なる刺激を與へたるものは、姑と云ふ一語である。他家に嫁する女人に取りて、姑と云へる一語は、震雷の如く鳴り轟ろいたるものである。サキの家に姑があると云ふ一語は、夫自身に於て既に女人の氣儘我儘を壓倒し去るの勢力があつたものである。姑は是れ良人の家に於ての監視、巡査、教戒師の如きもので、其前に於ては、少しの惰容も出來ぬ。朝は眞先に起き、夜は最後に寢ね、暇があれば肩をもみ、足をもみ、頭をもみ、さて寢ても、足を十分に伸すヿも出來ぬ。家に姑がある其間は、一刻たりとも、樂は出來ぬ。この姑が百年の後に於て、即はち新兵が古兵になる如く、自分が廻つて次の姑となりたる時に於て、即はち晩年の極々短かい間丈け、吾手を啓け、吾足を啓けの安樂が出來たのである。然のみならず、姑の附屬物として、コジウトなどと云ふものもあつた、之は鬼千疋に敵すなどと言つた、大したものとしてあつた。

◎家庭が斯樣では、何の樂しみも無いと言ふのが、一と通りの議論である。然し、樂しみと云ふものは、樂な故に來るものではない。樂なから樂しそうに見えるのは、たゞ傍觀者の方から斗りで、當人は決して樂しいヿはない。凡そ、人生の樂しみと云ふものは、苦の中にあるので、樂の中にあるものではない。もし又、人間が只だ樂をするヿを目的とするならば、夫も亦可なりであるが、人は樂を目的とすべきでなく、人間らしくなるヿを目的とするものである。左すれば、家に姑あり、一生教誡の中に入られたりとも、夫を以て堪へがたく忍びがたきの苦とすべきでは無い。家康が、「人の一生は重き荷を負ふて遠き路を行が如し」と言われたる教を美なりとせば、姑教育などは、其の理想に近づいたものである。

◎ことに又、昔しは、女學校が無かつたなどと言ふ人もあるが、成程、今のやうな女學校は無かつたが、理想的の女學校はあつた。即はち、戸々の姑は嫁に取ての個人的の教師で、所謂ゆる家庭教師であつた。元來、今の學校組織などは、不得已の究策に出たもので、決して十分のものでは無い。家柄と、學力と、習慣の違つた書生を、一堂の中に列ばせ、教師が高い所ろから演説して、二階から目藥の樣な事を言つて居る。之れは實に緩漫極まるものである。寧ろ、古しえの師弟

の如く、一人と一人、相契合し、其の機根に應じ、其才華の開く季節に應じて、適切實地の教訓を與へたらば、之に越すヿとは無いのであるが、今の如く、書生多くして、教師少なき時代に於ては、夫は出來ぬ。よつて止むヿを得ず、今の樣な學校が出來たので、之れは只だ半途の變則である。夫を忘れて、生徒の多數あるを得意にするものなどのあるは、思はざるの甚はだしきである。幼稚園の尤とも盛んになつた獨逸國には、大きな幼稚園は無い、即はち戸々の家庭が、幼稚園となり、其母が保姆となつた。之が即はち幼稚園の理想に近づいたのである。女學校も亦た其の通りで、一人の娘に、一人の家庭教師が附き、其家柄、身代相應に、一々實地に付て、實際の教育を施こしたらば、之に上越す女子教育は無きにあらずや。古の姑教育は即はち之であつた。古の女子は、この實地の女學校に入り、實地で練り上た實際の教師につき、日々夜々、一廉の教育を受けた。之こそ眞に理想的の女學校ではない乎。左すれば、今の女學校は寧ろ墮落で、昔の女學校こそ、反つて優等であつたと思はねばならぬ。

◎此等が、古の女學を今の女學に比しての優所長所である。

理想の男子（二）

婦人連

◎女の好きな男は、第一に、勇氣のある男子で御座い升。勇氣のない男子は、丸で女くされの心地が爲まして、極々虫が好きません。勝負事には勝ち、應接すればハキ／＼して、嫌な事は嫌いと明白に仰しやる樣な人が、極好きなのです。煮え切らない思ひ切の惡い、愚痴ぽい、泣言いゝなどと來ましたら、身ぶるひが致します。夫から、キザな男子、自分で文明だとか開化だとかお言い爲つて、自分ばかしお利巧な顔をして、聞きもしないヿを、ツベコベおしやべりして、きいた風な御托を幷べる男サンは大嫌ひで御座い升。ソンナお方は女ハイカラとか申すものをお育になる方へお出になつて、戀愛だとか、ホームとか、何とか云ふヿを、黄ろい聲を出して仰しやるお方々にお見せになつたら善う御座いませうが、手前どもの樣な、明治前に生れた、頑固ものには、一向に流行ませんよ。

◎近頃の男子方は、ナゼあの樣に似てるのでシヨウ乎。男の僻に、生白い顔をして、もみあげをすり込んで、髮を漆の樣

に分けて、香水などをブン／＼おさせなさる。アレは全躰、誰に見せるつもりなのです乎。いくら西洋風だと言つて、アンナ輕々しい風はありますまいと思ひます。折々、西洋の方も見ますが、モットどつしりした、男らしいものです。アンナのは、西洋の方でも才取か、通辯か、乃至、宿屋の客引などに多くある型ではないのでしよふ乎。

◎男子にして、女の樣に氣がつき、家の中の事に世話をやき少しも、ボンヤリした、鷹揚の所のないのは、極いやなものです。

◎男の餘り鄭寧な應接も感心しませぬ。夫が、昔しにある切り口上で、お使者の言ひ相な凛としたのは、宜しふ御座い升が、氣の張りのない、たゞ腰の低い、餘計にお世辭を言ふ樣な應接は、猫の心地がして、不快に存じます。

◎家庭の樂しみと申候事は好ましきとには相違なく候得共、男子達が連と仰せられ候は、ちと女々しき樣に感ぜられ候。家庭の好樂を犧牲にして一事に奔走あそばし、或る時は妻子をもお搆ひなきと申すが、私共の苦しき中の感謝、涙の中の敬服にて候。

女子の中等教育程度に於ける外國語の研究

山形東根

中等教育程度に於ける女學生の外國語即ち英語の研究は目下の一大流行なるが如し。夫れ既に流行なり、之を追はずんば恰も恐なるに似たり、而かも其の流行に惑溺し前後の思慮もなく、其の研究の趣旨だも解し得ざるものあるに至りては嘆すべきに非ずや。夫の惑溺し去りたるの徒は到底之を度すべからずとするも、せめて將來の就學者の爲め、一言警告するも亦無用の業に非らん。

外國語は何の爲めに學ぶの要ありや、一に云く、自國の言語文章典籍を以てするも未だ甚だ不十分なるものあるの時代に於ける必要なり、一科專門の深奥なる學理を究めんとせば今日の場合、我國語を以て充足せざるものあり、爲めに苟も學者を以て世に立たんとするに當りては必ずや先づ歐洲文明國の言語文章に通ぜざるべからず、又所謂學者たらざるも外國貿易に從事し、外人と應接する用務に從ふものは少なくも一外國語に練熟し居るの要あり、二に云く、家庭教育及び交際上の必要あり、子女の爲めに復習を爲さしめ又は外人の來訪に接して一言半句の挨拶を爲し得ずして赤面する如きとなからんを要す、三に云く、理想構成の爲め將た自家修養の爲めに要あり、縱令學者として世に立ち又は外人と應接するの必要なしとするも智を研き德を高むるが爲めに偉人の遺せる典籍を繙し其傳記を讀み其理想の感化を受くる等の要あり、四に云く、職業として衣食の道を立つるの方便とするなり、他學科の教員たらんより外國語教師たるの需用多く俸給高からんには、之を以て職業とするに便利少なからず、今日外國語を學ぶの要點は以上の四個にあるべしと信ずるものなり、如今交通の機關大に發達し東亞文明の接觸日々益々繁を加ふるに從ひ更らに幾多の要件を生じつゝあり、何人か今日其研究を非とするものあらんや、外國語研究の必要や夫れ此の如く明白なり。

然れども教育は語學教授の一法を以て達すべきにあらず、其程度に依りては之を加減し或は之を省略せざるべからざるなり、今中等教育即ち高等女學校程度に於

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

けるに學校に於ては之を如何なる度合にすべきやは、多少考究しおくべきものあるべし、今日男子の中等教育に於ても之を隨意科とすべしとの論少なからず、女子の中等教育程度に於ては特に其節減省略の要を認めずんばあらず。

世の論者の如く女子は斯の如き者なりと豫め斷定して將來の進歩の程度を區劃し去る如きは嗚呼の業にして余輩の排斥する所なりと雖も、小學程度を卒へ中等教育に入りたるものは尙ほ未だ普通教育と稱すべく、其地位たるや一科專門又は二三の選科を修むべき時機に非ずして其全科に對して偏頗なく學習すべき時なり、今若し此の程度に於て偏する所あらんか、啻に中等教育の趣旨に反するのみならず一種の不具者たらしむるに外ならず、何物をも一通りは之を辨し、或物に對しては何物をも能く辨知せしむるは教育上の一要件なり、然るに今日の女學生の傾向する所を見るに中等教育程度に於てすら或一物に偏し又他を顧みるの遑なきもの少なからず、之れ決して毀すべきことにあらさるなり。

先づ今日の中等教育程度にある女學生としては、英語教師となるか、家庭教育の爲めとするかの二點を外にしては外國語研究に多大の勢力と時間を費すの要なきを見る、而かも一身の係累なく獨立自營斯學に貢獻せんとする如き希望を有する者は例外として十分の研究を重ぬるは素より妨けず、斯の如き熱心の徒の輩出せんことは將來の爲め大に奬勵せざるべからざるなり。

然れども自己の目的は、家庭教育の用に供せんとならば、特り一外國語のみ重大の必要あるにあらずして、均しく各學科より習得する所なかるべからず、又單に英語教師として立たんとせば會話、作文、文法、習字をも兼ね修め一の譯讀に限るべきにあらず、然らざれば英語教師としてすら不能の者となるべし、而して英語教師養成を目的とせざる女子の學校に於ては、凡て之を隨意科とし大に時間を節減せさるべからず、余は此點に於て文部省の規定せる高等女學校の學科程度を是認し、官教師の女學校及之に準する學校の仕方に向つて非認せざらんと欲するも得ざるなり。

官教師の女學校乃至之に準ずるものを見るに、外國語は唯一主要の學科にして九分通りの勢力は之が爲めに消耗せられつゝあり、而して自國の言語文章讀書の素養に至りては殆んと驚くべき程度にあり、余は必ずしも古風の國粹保存を主張せんとするにあらざるも、今日或る種の女學生の傾向に對しては之に反對を表するものなり、惟ふに國民としては尋常普通の能力を備へさるべからず、然るに尋常普通の書簡文を能くせず、誤字、當字多く日常談話する自國の文字をも書取ると能はず、簡單なる文章を綴ると能はされば、日常の應接言語をも能くせず、即ち其年齡に應じたる相當の應用を爲し得ざるもの少なからずして、一に外國語研究に熱中するは何ぞや、斯の如きは聊かも賞すべき現象に非るなり。

二千萬の女性中、多年間に一二人外國語に堪能なる婦人を理想とし、之に倣はんとする敢て不可なりとせず、而かも其傑出せる著名の婦人平常の素養練習一通の苦心にあらず、自國の言語文章は勿論諸般の事物に對し周到たる觀察を爲しつゝありて、即ち多年の練習の結果に外ならず、然るに今の女學生や殆んと萬事を放擲して唯一外國の書籍を譯讀するに力めんとす、しかも彼が誇る所のもの之を譯して文字を爲さず、之を言ふて語を爲さず、彼は普通の能力を欠くを以て世相を觀ると能はず、人性を描かんとするも一部の同志の範圍に止まり、又何等の用を爲さざるもの滔々として皆然り、千古の名文、泰西文學の粹、豈に中等教育程度の婦人の解し得る所ならんや、之を解したりとするは漸く讀み得たりといふのみ而かも偏頗なる語學教育の一法を以てして將來何の用をか爲す、思はさるの甚しきものといふべし、而かも夫れ流行なり之を追はずんば恥なるに似たり、實は自らの愚を悟らざるの致す所なるを知らざるなり。

中等教育程度において唯一外國語に全力を注ぐは、何れの方面より見るも非難すべき事なり、(一)英語教師たらんとする乎、三四年の研究特に未熟なる方法を以てしては文部の檢定試驗に應じ得らるゝものにあらず、去つて小學に赴かんか其科や隨意科にして全國中之を設置するもの稀有なり、加之男子の競爭あり、幸ひに教師たるも正則に學びたるに非ずんば讀書力の一方を以て決して其要を爲さゞるなり、(二)家庭教育上に於ては或る特別なる家の外は、幼少より主婦自ら教授し復習せしむる如き必要、今日に於て甚だ少なし、唯子女の小學高等科に入りて隨意に學習し歸宅の後ち之に復習せしむる際注意を與ふるの心得あれば足る、而かも甚た稀有の事とす三年乃至四年間讀書力に費すも若し之を平常復習し之を練るに非されば三四年を經過せば全く學ばざりし時に均しく殆んと何等の用を爲すもの

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に非ず、家庭幸ひにして讀書三昧に耽ることを得るものならんか、學習し得たるものを維持し行くこと困難なるに非るも、斯かる家庭は千萬軒中、僅かに二三あるのみ、(三)一科專門の學科に就て特に研究を遂げんとする乎、男子と相競爭するの覺悟なかるべからざると同時に、單に語學のみならず、一切の學科に對して趣味を有し之を平等に熱心に修めざるべからず、一科學は各科學を知りて始めて知得することを得る者にして、始めより絕對獨立にして他科と無關係なる學問は、未一つとして之れあるに非らさるなり、夫れ未だ中等教育の程度內に於ける各種の練習學得なくして猥りに專門に入らんとする如きは狂愚の至りなり、(四)文學者たらんとする乎、如今文學の趣味あり又文學者たらんとするは特に英語研究に熱中するか如し、之れ婦人の立場として頗る適せるものなり、而かも文學者とは唯一英學を修めて達し得らるべきにあらず、小說をものするには社會の事情より人情の機微をも知り廣く世事に對して觀察し且複雜せる世間の事實を識らさるべからず、唯夫れ流行の小說類を飜譯し、大家の一二詩文の講義を聞くを以て文學者なりとすべきにあらざるなり。

惜い哉、流行に惑溺せる女學生や、彼等は貴重の時日を費し、父兄より多大の費金を投ぜられて、其の學ぶ所は抑も現在並に將來に於て如何の實用となり、如何の價値を有し又如何の修養となるやを知らざるなり、人學ぶが故に我れも亦學ぶなり、社會未た其價値を認めずして之を看過するが故に、特に必要なりと迷信するなり、之を知らざれば同輩に輕蔑せらるゝか爲めに之を學ぶなり、彼は他人の好評を唯一の標準とす、自己の修養福善の進捗に何等の關係あるやを解せざるなり、直接生活の爲めに必要なる學科に未熟にして且つ簡單なる教科書が讀み得れば以て足れりとし、自國の讀書、習字、書取、文法、裁縫等も漫に之を輕視し去り寧ろ是等を能くせさるを以て却て其誇りと爲し、外國語の研究に唯之れ力む、而して卒業の後ち何等家庭に入り社會に立て應用せらるべきやを知らず、斯の如きは之れ大金を投じて不具者たらんことを力めつゝあるものと云つて可なり、女子は由來、外見を主とし、他人の好評を標的とし、流行を追ふに力めて自家の獨立せる識見を缺くものなれば、直接教育に當るもの深く意を用ゐさるべからず。

見よ、今日の女學生中其の外國の二三文書を字引と首引して讀み得ると稱し又は大文學者の典籍を讀むと自稱するものを、讀んで之を自國の言語もて正當に發表し得るもの幾人ぞ、之を譯して自國の文章に綴り得るもの幾人ぞ、將た之を讀みて己が智德を研くの方便とし得るもの幾人ぞ、實に十年にして二三四五人、二千萬人中、僅かに指を屈し得べきに非ずや、女學生となれば外國語を知らざるべからずといふ一種の迷信に外ならずして、之を學びて共等の語を以て綴れる書籍を參考とし、以て趣味を增し以て深く學究せんとするに非ず、則ち外國の思想を利用せんとする大希望あるに非ずして、女學生となりたる好評の爲にし、又同輩の流行に驅らるゝのみ、而して外國語に達せさるを指して「教育」を受けさるものなりと蔑視するに至りては愚と云はんか、狂と云はんか、唯歎くの外あらさるなり。

教育とは學校に於て一通りの學科を修むるの謂に非ず、況んや外國語を解すと解せさるとは、教育といひ、人物の價値といふに於て一毫の關係なきとなり、外國の書籍を讀み得ると稱して未だ尋常普通の理解力を備へず、世間の義理人情に與らず、自國の讀書、綴字、書簡文をも能くせざる如きは、未だ他人に向つて我は外國語を學びたりといふの資格なく、又學びたりとも何等の用を爲さゞるもの、寧ろ不學に若かさるに非ずや、如何なれば今日斯くも誤解せる女學生を出したる乎、之れ局に當るものゝ深く考ふべきとなり、一方には遊藝を以て無比に重大なるものと爲す古風家あると同時に、他方には外國語は一科に重大の理由を附して只管之れに向はしめんとするハイカラー教育あり、之れ余輩の斷じて贊成せさる所之れ人の子を害ふものなり、未だ中等教育程度の學生の能力を辨せさるものなり、小學程度を漸く終りたる如き子女に對し偏頗なる外國語を强ゆるは、單に英語教師を目的として養成する學校に於ても、未だ容易に取るべき方法に非さるなり。故に余は日本今日の程度に於ては文部の高等女學校に於ける學科配置を以て比較的良制なるを認むるものなり。試みに今日の小學課程を見よ、明治十年前後の課程に比すれば其讀書力、數學の如き正に四ヶ年程後れたるものにして、昔は十一二歲の少年をして、蒙求、日本外史、史記、八家文等を讀ましむる亂暴なる仕方なりしも、讀書算術等は兎に角高度にありき、今の高等小學を卒業したりといふも全く小兒同樣にして以前に比して非常の相違なり、然り而して女子は小學尋常科の際は男子と並行し得るも高等小學に入りては大に劣るものなり、之より

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

更らに男子より劣るとは事實明白にして中等教育に進むに從ひ疑を容れさる所、斯くの如く小學程度の頗る低下したるに加へて能力の漸次鈍くなるものに對しては、教授の方法に就て大に考へさるべからず、其の漢文を讀み、和文を讀み將た數學を學ぶの程度に就ても、之を教授するもの試みに今日の高等小學の程度如何を一瞥せば必ずや一驚を喫するものあらん、然るに今の宣教師的女學校に於ては一に外國語に全力を盡さしめ、他學科は躰裁上の看板の如く全く附屬視せられ、加ふるに小學程度を辨知せさる突飛的高尙の思想を吹入る、亂暴の甚たしきものなり、其學生の實力なく、常識に欠け自國の言文に拙く、日常直接生活に用ある普通の事理を辨せず、世事に迂く、人情に淡く、女らしき女を得さるは當然の結果といふべし、而して女の天作に反して女らしからざるを以て教育を受けたるものとし、異風を飾り變則的となれるを以て得々たるは實に奇と云ふへし、若し世に女子教育を非難するものありとせば、之れ非難するものゝ罪に非ずして正に非難せらるゝもの丶罪なるを認めずんばあらず、而して教育といふとの趣旨の誤解せられ、亂用せられつゝあるは、獨り女子教育の大半のみならず、官公立の男子の學校も亦概れ然り、噫何故に庸師を先にして實用を後にするや、何故に他人の好評を標準として自家の立場を考へざるや、而して空漠として多大の金錢と時日とを費し、毫も自ら顧みるとをせず、彼等は日々精神的不具者たらんとし、又教育を受けたりとの看板を得んが爲めに汲々たるのみ豈嘆すべきに非ずや。

◉女學雜誌の再興

久しく休刊中なりし女學雜誌は、再び巣鴨の村より生れいでたり、前身の女學雜誌は明治新女學の曉鐘なりき。健全なる人生觀の上にたちて、淸高なる情操、溫雅の趣味、自主自由の精神的教養を鼓吹したりし當年の音容は、青年男女の忘れんとして忘るゝ能はざりしところ。今や新元氣を以て、こゝに後身の女學雜誌を見る、趣味滿幅、優に往年の風神を存して、生氣更に奕々たるものあり。思ふに時勢に激するところありて然るものか、「現代の酷弊、自主自由なきに在り」。「孰か女學を隆盛なりと云ふ」の社說を始めとして巖本氏の筆になれると覺しき隨感錄、その他の雜錄讀んで限りなき興趣と教訓あるを覺ふ、明治女學校は由來女學校中の淸謐と稱せらる、女學雜誌はまさに此學校の美くしき空氣と精神との流風餘韻なるへし。女學雜誌の再興は、日本婦人界近來の福音なり。「新人」第四卷第七號

光瀾之觀

花觀の釋幷に遁棲の謬

奥邃

某氏手紙を以て告て云く、此頃余が書齋成る、梅花書屋と曰ふ、請ふ之が記を作れ、此れ嘗て祖父の名づけたる所にして吾之に寓するに遁棲の意を以てすと、夫某氏は誰ぞや、家儒にして而して凡そ二十年前所謂耶蘇教信者と爲れる者也、余が舊知也、ああ、余未だ其の所を覩ず、且遁棲の事は余尤も氏の爲めに贊稱せざる所の者也、之が記をなす能はず、仍て單に花觀の釋と遁棲のあやまりとを畧書して以て氏に贈るもの如左、

その釋に云く、花觀の感は良心の發也、良心我れに照明なれば、花の香色吾が神と肉とを通ふし、快然として表上に淸旋す、もし吾が耳心にして蔽塞せられば、花有りと雖も吾將た何を以て其の樂みに感ぜんや、抑も生命の我が中に在や、開發して形ちを爲せば此れ花と爲る、高く天に原す、淸也美

明也暖也、關係廣大、萬物と共愛せざるは無し、而して今某氏の特に之を梅に擇べる如きは、蓋し亦其明徳の品色香味自然之に類する者有りて然るに非るか、余故に云く、花觀の感は良心光明の働き微物に觸れて徳性を發育する者也、此働を以て此の物を看れば、眼中愈〻清く、此の働を以て此の物を嗅げば、胸裏益〻開て暖かに、且此に於て此を樂めば、則ち吾れ能く我を忘る、而して其の能く清く暖かにして我を忘れざる有る無きに至れば、則ち吾が居る所、假令一の花木なしと雖も、清明快樂にして百花の常觀あり、其清愛深香曾て障礙有る無く、顯れては此れ實業の界に出で、隱れては此れ社會の心に入る、畢竟吾が明徳の通存和達する者に非ざるは無し、能く擴めて之を充てば、則ち以て太陽に乘じて貴神に達すべし、若し然らずんば、花の物たる只だ少時間の色、亦何の趣味吾が心に有らんや。

然則遁棲何ぞ妄謬、曰く、此れ眞人救世の勇に反すれば也、是れ滅亡の妖孽なれば也、戰敗れ魂褫れて身は殘賊の世に降るの徵なれば也、是れ老莊の見に惑ふて腐儒幻僧の巖穴に落る者也、正に人生の資格を拋擲する者也、夫れ人生勤務の餘、固より其安息を要す、靜養を要す、善養を要す、而て其然る所以の者は、將に復た以て大に吾が天職を奉ずる有んと欲する也、是の故に天下の似て非なる者は遁棲に若くは莫し、手を地獄の陰に袖にして而て人の精神を傷害する者は遁棲也、豺狼の羊皮を蒙つて羊羹を欺き而して之を喰ふ者と其實何ぞ異ならん。

"Nature, with singular felicity, has been termed the time-vesture of the Eternal: but nature is more: it is the time-form, the time-mirror, the time-light and time-shadow of the Eternal. Nature is alive: she is replete with a vitality that is not her own: the seeming deformities conceal a beauty, an excellence and a perfection. That they may bring forth this hidden beauty into radiative bloom the ages conspire, the forces of eternity operate in unisons. In the outer nature-realm of the lower level, the realm that has been defined as that of the lower appetite, we see the work-shop of the inferior forces; yet here the mineral tends to the vegetable, this to the animal and this again toward the human nature: the spicular formation of the crystal seeks to become an efflorescence; it dissolves into electric fire, flinging up images of floral grace, as the pent spring may leap, when liberated, into a fountain sparkling with prismatic hues at the touches of the sunbeam."

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

記録

某學校吾が監督狀況を問ふ、回答曰、人の子たる者は當に以て人と爲るべし、故に完全の人に至は吾が學の目的たり、子弟をして此の目的の範圍に於て游動せしむる者は吾が教導也、監督無他之に從ふ而巳。

惟一標準中、各人の天職に關する分子標的有り、各々其人に貴し、我れ之を認めて志を立つる的切堅確なれば、則我れ上進して其榮光我れに接し、其遊動する所の範圍相繊て我に廣まる。

眞に志を立る是れ易きに非ず、然に誠に能く其本心を喚起して、光明の標的に照せば、少青年と雖も其志を立を得、吾れ其語を聞き、又其人を見る、人能く其自性の我儘なるを感知し、其儘に居て其儘に增長せば人と爲る能はずして必ず生命を失ふを覺り、奮然自拔、善化して以て完全の人と爲らんと欲せば、其志是に於てか的切堅確ならむ、凡そ志の立ち難きは、人自ら完全の人と爲るを願はざるに在り、若し之を欲せば亦宜く寧靜の門に由るべし、所謂寧靜は、活動無きの謂ひに非る也、更に其本有り、其事ふる所也、當に常に光明の標的に相照すべき也。

今夫鳥獸は單純の動物也、其開發の際限小且卑し、不善有と雖も罪に至らず、唯だ人は然らず、本神與の大權を有する者也、當に靈を貧ふし身を勞し、以て有神無我の大人に至るべき也、而るに此人や若し墮落して自ら私慾の地獄に陷るを致さば、是れ其大權の重力を以て自ら反轉する者、其落るや深く鳥獸の下に陷る、嗚呼友よ、宜く悅んで之を聞べし。

大人の言に云く、若男子能く深く其身と心とに省察すれば、自ら或物の男子以下に屬する者其中に存する有るを發見す、女子能く深く其身と心とに省察すれば、自ら或物の女子以下に屬する者其中に在るを發見すと、所謂「以下」とは、單純なる動物性を謂ふに非る也、此れ神定の人格より反覆して下る者是を以て、男より以下、女より以下なる或る物と謂ふ、適當の處に適當する言語有り、必ずしも修飾を用ゐず。

凡そ生命其中に存する者は、人たらんと欲するの志時と共に立つ、若し其中に生命無んば、人面有りと雖も之を奈何ともする能はず、我れ若し奮然志を立て而して確然之を持せ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ば、假令天下吾に敵すと雖も我を搖す能はず、我が道終に破竹の勢を以て世に勝つ者、必然疑無き也。

凡そ少年を養ふ者は、宜く靜に之を養ふべし、而して之を養ふ、宜く其當に養ふべき所に於て養ふべし、過度に之を制する勿れ、私心を以て之を思ふべからず、私愛を以て之を愛すれば、必ず之を害す、之が天性を殺賊す、吾が所謂私愛の字宜く深く考を致すべし、蓋し今ま人其子を私愛せざる者は天下に鮮し、夫れ私愛は、私慾也、其の將來に於て慘憺に結果する者明々白々也、此親有て此子を來す、親私愛の親たれば其子亦私慾の子と爲る、此れ理の當然、私慾は公愛の道に活る能はず、私愛は禽獸に異なる人に至る能はず、然而して私愛の未だ父母に已まざる者は、蓋し惡因緣有て然る也、何ぞや、彼等は其根性に於て既に邪神の使役する所と爲り、一事には、各自其父母の愚癡より遺傳せられし悲歎の情を已が子女の身に於て竊に復讐せんと謀る者也、此れ其生前生後に纏縛せられたる惡因緣より神種に敵する者也。

言に云く、靈心貧き者は福と、此れ私己の靈心也、未だ自我を離れて超然たる者に非ず、故に宜く抑制して貧からしむべし、既に能貧ければ、宜く又更に之を貧ふせしめ、以て私己即自我の斷絶するに至るべし、人能く此に至れば、即ち心身皆有神無我にして强剛たり、故に我を貧ふするは、道に進むの初步と知るべき也、夫れクライストの敎は、修養の學也、而して眞の修養の學は、クライストの敎に從ふ者也、若し學んで此敎に由らずんば、千辛萬苦すと雖も終に活潑眞實の修養を能くすべからざる也。

クライスト云く、我が手を視よ、又我が足を視よ、之を持して之に感ずべし、虛靈は肉骨を有せず、我れ肉體を有する如此し、且我れ爾に遠からず、又爾を離れず、尤も常に子格を以て爾の中に居る、我は父の如し、啻だ相似たるに非ず、實に我と父とは一たり、我を見る者は即父を見る者、我が人爲るを見る者は、以て父の人爲るを知る者、我れ虛靈にして變幻するに非ず、有體にして復活す、飮食すべき時は則飮食す、爾我れに食物を與へよ、乃ち取て之を食せり。

如此、貴神クライストは手有り、足有り、口有り、腹有り、完體眞有之人也、以て言ひ、以て敎へ、以て食ひ、以て養ひ、以て働き、以て救ひ、以て休ひ、以て恤む、至らざる所無く、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

入らざる所無く、存ぜざる所無く、而して所に在りて、又所の外に在らざるは莫し、此れ貴神の貴神たる所以也、衆天の上、萬界の中、凡て血氣ある者、在天の父母を認めて其快樂に生息せざる者之有らざる也。

此れに生きざる者は、此れに在らざる者也、然とも貴神の愛は無量にして被造の總生全衆を愛し、之を治むるに無量の智を以てし、之を養ふに無量の能を以てす、其無量の愛を以て之を愛せらるるや、罪惡の人と雖も之を洩さず、終に之をして皆な善に化せしむ。

訓に云く、溫如レ鴿智如レ蛇なれと、夫れ蛇は龍也、變化の智健働の力は、貴神の龍性也、惡蛇は罪に死す、而して善蛇は貴神に昇る。

◉新井奥邃氏の妙文

新刊の女學雜誌見るべきもの尠なからず、而して吾人は奧邃新井氏の光瀾之觀一篇を讀んで言ひしらぬ微妙の感にうたれぬ。奧邃氏は信仰の深邃、人物の敦厚、現代稀有の隱者として基督教界の一部に知らる。惜いかな作るところの文章、常識の理解を超え、いまだ世人の知るところならず、氏の小著「讀者讀」のごときも、たゞ少數の愛讀者あるのみ。吾人は氏が漢文に精通するを聞いて、その文に接せざるを憾みとせしが、今光瀾之觀一篇を讀む、情趣渾然として、溫玉の潤へる如し。溫風起而光明爲瀾、眞人在陰、靜爲而餘音多福、小童弱兄於是乎含厭我而相携、膠々然快樂遊動、嗚呼是何觀也、光明有瀾、同人以洗心。舒べ得て何等の美觀ぞ、吾人を以て見れば、思ふに此文は基督教文學近來の名文ならむ、いな日本に於ける基督教文學唯一の名文ならむ、いな是れおそらくは漢語の生みたる千古の名文ならむ。かくの如き文は決して尋常一樣の作す所にあらず。（鼎浦生）（新人所載）

雜錄

近親結婚有害の哲理

青柳有美

骨肉相婚すると、今の君子これを稱んで不倫といふ、蓋し、所りて以て身心虛弱の子孫を擧ぐる源を作ればなり。否な唯に骨肉のみならず、既に同一緣族に屬して少しく其血を同ふせば、從兄妹の如きさへ、なほ且つ其間に健全なる子孫を得ることや、誠に難し。是れ今の學者の君子ならざるものも、明に能く證據することろなり。

然れども、古の世、人類未だ多く地上に繁殖せず、たゞ僅に二三の血族のみを存せし比に當りて、近親結婚により健全强壯なる子孫を擧ぐる能はざることなほ今の世に於けるが如くんば、如何ぞ能く今日の數十萬億なる人口あらんや。太古の代は神々の代なり、人の代なる律法によりて縛せられず、父は娘と契りて罪なく兄は妹を抱ひて更に孱弱なる子孫を生めること無し、況んや從兄從妹相婚するが如きに於てをや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蓋し亦天道に進化あり天則に臨機應變あればなり。

これを統計學家に聞く、國もし戰亂にあれば出生兒の割合女子よりも男子を以て多しとすと。これ則ち天道の人事に感應して其常軌を變ぜしものに非ずや。此くの如くにして、人口僅少の太古にありて、能く多くの强健なる子女を擧げ得し近親結婚も、人口繁殖の今日にありては全く虛弱なる子孫を生み出すの慘のみを見、其極不倫を以てさへ目せらるゝ、決して怪むに足らず、故に以爲らく、天道に進化あり天則に臨機應變ありと。

然らば、天道は何故に近親結婚の一事に於て、今と昔と其結果するところを、しかく異にせしめざるべからざるに至りし乎。學者よろしく之を知るべきなり。

人は、今の世に財產の平等所有行はれず、茲に貧富の二階級生じ、互に反目嫉視するものあるを說く。然り、貧富の懸隔は是れ近世喧噪の根本因なり。又人は、人種競爭と世界の戰伐とを說く。然り、國と國との確執はおの〳〵其人種を異にするにあり。大風の猛く暴れて草木と大厦とをなぎ覆す所因のもの、是れ氣壓の不平均に存するに非ずや。不平均と懸隔とは實に萬亂の源なり。

近親緣族は、讀んで字の如く近く親しき間柄なり。是を以て絕えず相來往し互に好を通ずるの機多きが故に、その子女の共に緣を結び遂に夫婦となりて共同生活を營むに至るが如き勢ひ數々ならざるを得ず、されば峻酷なる刑罰と不幸との其結果に伴ふもの無くんば、天下を擧げて近親結婚をのみ觀るに至るや、又素より自然の大勢なり。されば、かく天下を擧げて近親結婚をのみ行はしむるに至れば、忽ち災害の計るべからざるもの起りて茲に天下を攪亂するに及ぶべし。借問す、計べからざる災害とは何ぞや。曰く、人類界の不平均なり、人と人との隔絕なり反目嫉視なり。これ幻の如き倫理問題に非ず、利害に直接する實際問題なり、是に於てか此る災害の交々比び起らんことを恐れて天道これを未發に防がんとし、敢て近親結婚を行へるものを罰しこれを不幸に沈湎せしむ。近親の結婚は必ず虛弱痴劣の子女を擧ぐるに至るを例とし、天に法典なく又牢獄なく罰金無し。たゞ自然の制裁を以て是等に代らしむ。而して、更に衆愚を導くの聖人現れ、その自然制裁の行はるゝところを稱んで不倫と號し、世を擧げてこ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

れを避けしむるに力む。

近親結婚の行はるゝこと背ねからば、何故に人類界はしかく不平均を以て充滿せられ、嫉妬反目懸絶の、人と人との間に專らなるものあるに至る乎。

櫻樹よりサクランボウ出で、蛙の蛙の子を生むものあるは誰も能く知るところなり。此くの如くにして、人の子は又其親の如き、其の孫の其子に似るものある、素より言ふまでも無し、されば、結婚にして若し唯獨り近親間にのみ行はれ、絕えて異血族の血の一統族の間に入るもの無くんば、玆に人の世は無類の親統族を生じ、而して、その親統族たるや、互に他統族の血を交へず、毫も緣脈を混通融和すること無きを以て、年代を經過し世代の數を重ぬるに隨ひ、各統族はおのおのの獨立せる氣性を生じ、その趣味を異にし其傾向を別にし其利害を同ふせざるに至らんなり。卽ち甲血族と乙血族との差は、今の白人種と黃人種との差の如く、乙血族と丙血族との差は、黃人種と黑人種との差の如くなるに至らん。これ人類を無數の朋黨に分裂するに非ずして何ぞ。これ人類の不平均なり。

既に分れて朋黨となり、その間おの〳〵趣味を異にし傾向を別にし利害を同ふせざるものあれば、勢ひ此の統族と彼の統族と相親しむ能はず、互に確執し互に反目し、互に嫉視すること、かの沙翁が『ロメオ、エンド、ヂユリエ』なるカピユレツト及モンテーグ兩血族の間に於けるが如くなるに至るべし。

不平均のあるところには、動搖生じ暴亂起る。僅に人類社會に貧富の二階級現れしのみにして、既に喧噪を絕つこと能はず、その分るゝところの人種國家の數未だ甚だ多からざるに、早く又戰亂の聲盛なるを知らば、人類社會にして若し全く趣味傾向を異にする血族朋黨を生ずること無數なるに至らんか、その喧噪と動亂とは果して如何ばかりぞや、思ひ半ばに過ぐるものあらむ。

然れども、若し近親の結婚行はれず、彼の血族と此の血族と互に相緣組みするものあるに至れば、此れの血は彼れの血と混じ、彼れの緣と此れの緣と相連り、此の趣味と彼の趣味と相近づき此の傾向と彼の傾向と共に其行くところを同ふし、彼の人と此の人と大差無く、玆に朋黨起らず、人類界に各統族おの〳〵獨立して特殊の發達を遂げ、其極互に確執し、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

嫉視するが如きことなく、人類界の平均を觀るに至るべし。是れ天道の意趣なり。天道は此くして人類の不平均を忌み其平均を愛すること切なるが故に、不平均の根本たる近親結婚を罰するに、虚弱の子孫を擧げしむるの一事を以てし、これを阻遏せんとはするなり。

又特に聖人を出し、親子兄弟の如き骨肉間の婚姻を以て、甚だしく不倫の行爲なりと言ひ觸らさしむるは、此る婚姻が殊にその血族の特異性をのみ發達助長せしめて、一般世間と共通の趣味性情を欠くに至らしめ、これを隔絶すること誠に甚しきものあるに及び、人類界に最も大なる不平均を惹き起す恐れあればなり。

然りと雖ども、太古人口稀少の時に當りて、骨肉間の如き近親結婚すら、なほ且つ强健なる子孫を擧ぐるを得しは、一方に於て人口繁殖の急務なるものあると共に、人口餘りに稀少にして皆な近き血縁を有するを以て、如何に其うちの一部者が骨肉相婚することにより、一種の血族性を發達せしむるに至るも、未だ全く外世間と其趣味傾向を異にすると能はず、随つてこれを防遏せんが爲に、その結果の恐ろしきに怖て自ら之を敢てするに肯んぜざらしむるの要なかりければなり。故に又曰く、天道に進化あり臨機應變ありと。

人もし斯の近親結婚有害の原理を敷演せば、今日人種間に行はれつゝある嫉視反目の如きも、雜婚（インターマーリエーチュ）により巧に除却せられ得るものなるを知るべし。蓋しこれ世界人類の趣味傾向を概ね同ふして相接し相近づくに至らしむるの道なればなり。

年少哲學者を弔ふ

西内天行

極端なる懷疑の煩悶に陷れる、詩人的年少哲學者藤村某。當に千尋の飛瀑に身を投ぜんとして、無韻の詩、散文の歌に、臨終の感懷を寄せて曰く、

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーショの哲學、竟に何等のオーソリチーを値ひする者ぞ。萬有の眞相は唯一語にて悉す。曰く「不可解」我この恨を懷ひて煩悶竟に死を決す。既に巖頭に立に及むで胸中何等の不安あるなし。始て知る大なる悲觀

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は大なる樂觀に一致するを

と。彼は青春の士にして、熱血湧が如き情感の人なり。彼は理性を以て、宇宙の實相を了解せんとして、竟に熱烈なる情感に制せられたる者なり。沙翁の悲劇ハムレットの口吻を以て、所謂哲學者の哲學なるものを痛罵し、而して『我この恨みを懷く』と告白する處、其間の消息傳へ得て餘薀なし。彼は茲に於て宇宙を靜觀する哲學者たる能ず。曾てバイロンの有したる、果たシエレーの有したる、否、寧ろハムレットのそれの如き、狂熱激動の人物となれり。然りこの狂熱激動の詩人的年少哲學者は、既に巖頭に立つに及むで、胸中何等の不安あるなく、恐る可き死の觀念を、蹈破蹂躙して屹然天地を睥睨せるは、一個巍然たる大丈夫の如し、雄々しさ限りなく、壯快言語に絶す。

狂熱ある詩人の、激烈なる懷疑の渦中に投じたるは、恰も噴火山頭に立つ、醒めたる狂人の如し、彼は其恐る可き噴火山頭に立つて、醒たるが如くにして、實は狂ひながら、恬々として無韻の詩を歌ひ、亦有韻の詩を歌ふ。殊に懷疑派の詩人に於て其然るを視る。我邦に於て懷疑派の詩人にして、此噴火山頭に慘死を遂げたる者は、啻に年少氣鋭の藤村のみにあらず、洗禮を領してクリスチャンとなり、妻を娶りて良人となり、一子を得て親となれる、透谷北村が、廿七歳の春秋の身を以て、芝公園の松の樹に細繩を掛て縊死を遂げたるは、今を去ると八九年前にして、我邦神學界の渾沌晦瞑、特筆す可き懷疑時代なりき、彼はその詩才の警拔なるに置き、その觀察の超凡なるに置き、その情熱の猛烈なるに置き、殊に東洋のバイロンなりとの、評ありき。その人生の實歷、經驗彼が如くにして、而も宗敎問題の懷疑と、人生問題の懷疑との、紛亂錯綜の結果、自殺の人となれり。常に我机上にある、一卷の透谷全集はその無限の痛恨、無限の悲哀を止たる者也。北村の如き多少靈性上の實驗ある者にも、懷疑時代の大暗潮には打勝と能ざりき。況むや藤村の如きは、酷評すれば、宇宙、人生に對する靑二才にして、何等の靈的實驗を有せず、單に主觀的に、抽象的に、冷かなる道理を以て、宇宙の眞相を解釋せんとす。これ慥に無暴の極なり。理性に依てのみ萬有の眞相を解せんとするは、千古の哲人カントの警むる處、彼は理性の範圍を定めて曰く、理性は宇宙の絶對を知るの權

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

能なく、差別世界の相對的智識を領解し得るのみと。然りこの絶對界は單に純粹理性を以て見れば、恰も暗夜靜に淡路島を望むが如く、信仰美觀の光明を以て之を見れば、恰かも春光長閑に紀淡海峽を望むが如し。藤村は理性萬能力の誤解の間に、不幸、竟に宇宙に絶望したり。然れども北村透谷の如きは、理性の範圍を知るが故に、藤村の所謂不可解者を人類の親として、一たびは信ずるを得たりと雖も、人類の得意の者は尠く、失意の者の多きを見、則ち天父の愛兒と見る可き者は僅少にして、天父の繼兒の如き者の多大なるを見、玆に人生の大不調和を感じ、煩悶懊惱すれども解釋する能ず、猛烈なる情感の詩人は、消極主義の絶頂に到れるなり。藤村は宇宙觀の大本、絶對者を解する能ずして死せりと雖も、北村透谷は人生觀の基礎、則ち倫理的立脚地を得る能ずして死せり。前者は宇宙の孤兒とも云ふ可く、後者は人生の繼兒とも云ふ可し。

然れどもショウペンハウエルは藤村の大なる者なり。約百は北村の大なる者なり。天地の絶對意志は盲目なりと喝破したる前者は、天上界を仰ひでアバ父よ我神よと呼び奉る者を有せざる、宇宙の大孤兒にあらずや。何とてみ顏を隱し我をもて汝の敵となし給ふやと悲鳴を擧たる後者は、冷酷なる運命に翻弄せらるゝ、人生の大繼兒にあらずや。基督も亦彼等と同情同感の人なりき。曰く我神我神何ぞ我を棄て給ふやと、これ何等の悲鳴ぞや、曰く此杯を我より放ち給へと、これ何等の叫喚ぞや、而も最後の大道破を聽け、曰く大聲に叫びて我魂を汝の手に託くと。ゲッセマチの基督、及び十字架上の基督は、悲風、暗憺、何等の希望なく、何等の光明なきが如しと雖も、而も竟に我靈を汝の手に託くと云ひ、父よ彼等を許し給へと叫ぶに到りて、基督の基督たる處は全く發揮せられ、亦成就せられたり。當時の頑迷固陋なる社會が、彼に對する迫害の絶頂は、彼を宇宙の大孤兒の如く、天地の大繼兒の如き斷腸の最高頂に到らしめたりと雖も、勢ひ極れば必ず變じ、哀情極まれば歡樂を生じ、苦痛極れば必ず平安を生む如く、基督イエスは天上天下空前絶後の大悲哀の極點に達して、玆に無限の平和を呼起し、玆に絶對の靜穩を大覺して、胸中光風霽月の如くエタナルライトを認めたり。永遠の光明は彼の胸臆に溢れて、その風采に輝き、その人品に發射した

り。此時、最後の琴線に響く聲ありて曰く、爾我を知る如く我爾を知る、何ぞ我靈を爾の手に託けざらむやと。斯して彼は宇宙の孤兒たる境遇を脫し、人生の繼兒たる情感を離れ、悲哀を蹈破し、絕望を蹂躙し、別言せば大なる悲觀を超絕して、大なる樂觀の極致妙趣を發揮したり。彼れ人類の救主たるは、彼が堪難き苦痛を實驗して、其苦痛を化脫したる、吾人と同情同感の偉大なる人格なるが故也。

あゝ此基督イエスの心情を、深く味ひ深く學べば、藤村が解す可らずとなせる絕對者に對し、得も謂はれざる床しき心を以て接し給ふを見る。亦北村が煩悶したる人生の大不調和に對して、自己の人格を以て最後の調和を示し給ふを見る。カントは論理上理性の範圍を定めたるに過ずと雖も、基督は赤兒がその慈母に對する如き靈的實驗を宇宙の絕對に對して有し給ふにあらずや、ソシアリストの理想は、漸く人生の大不調和を解釋せんとするに先むじ、神と我とは撞着する者にあらず、神と人生とは其根本に於て一大調和なりとの證明を、自己の靈的實驗を以て社會に敎ゆ。藤村の苦悶も、北村の懊惱も基督の最後に到れば、一大解釋を見るのみにて、恰も太

平洋の暗夜を過ぎて、太西洋の白晝に出たる如し。惟ふに藤村の心膽は五尺の小軀よりも小也。北村の識見は縊死したる芝公園の松柏よりも低し。故に宇宙の絕對を解する能ず、人生の大調和を達觀すると能ざりき。然れども基督の膽識は宇宙よりも大にして、其識見は人生の窮極を達觀したるが故に、凡人の知る能ざる者を絕對者に於て發見し、人生に於て發見したる者なり。玆に到れば基督の崇高偉大を驚嘆するの外なく、藤村北村の徒の狹隘微弱なること睫毛の先の塵の如し、吾人は誓つて睫毛の先の塵の如き人間となる如く、基督イエスの人格だも倘ほ且凌駕する底の大人格となり、天地人生を眞に傾發開導するに到らむとを切望して已まさる也。これ神と基督とが、吾人に要求する大責任なれば也。

殊に廿世紀の思想界は、十九世紀の最深最大の暗黑時代を經過して、白日天に懸り、光明六合に遍く、希望平安の時代を現出したり。最早、科學と宗敎の衝突時代は過去となれり。宗敎は科學の試驗に遭ふて、健全なる發達を見、科學は宗敎に觸着して、單にリーズンのみにて解釋せられざる、秘密の宇宙に存するとを知れり。故に彼等は一度は驚く可き大

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

衝突を試みたりと雖も、竟に相互の誤解は氷解せられて、和氣藹々たる中に握手するに到れり。進むで人生問題に對する疑問の如きも、時に天道是か非かと嘆ぜしめ、上帝は時に多數人類の大繼母にあらざるなきかを感ぜしめたりと雖、ソシアリストの理想が、追々明晰となるに從ひ、この理想の中には貧富の懸隔なく、隨つて幸福の兒と非運の兒との差別を見る能ず。文明進歩の極致なる黄金時代の幸福圓滿は、この理想の成就に存ずるを認むるを得たり。故に若しホレーショの哲學の如き、一種の僞哲學にあらずして、信仰ある哲學ならむには、人類の胸中に光明を與へて、死より永遠の生命に到らしむるを瞭々たらむ也。

白百合

左季女

二日の梅雨餘殘なく晴て、庭は青葉の色美敷、一段高きは棟の梢、頃しも咲る薄紫の、小さ小さき花の數々、有か無かの風に吹れて、チラリ、ホロリ、落れば池に、小波立て、金魚は之にも、と胸を刺れぬ。偖も萬有の階級、とり〳〵なるこ

そ面白けれと、我獨りホヽとしてありし所へ、表に當り、花や花やの賣聲聞ゆ。何の花かと呼入見れば、今を盛りの白百合なりけり。我好なる枝振見たて四本五本購ひたり。先花瓶に挿ん者と枝取上れば、扨も清秀として夏らしき花なる哉。抑々御身を今此所へ擔て來た、あの頬被の小父さんは、村の人か、隣のか、又は家のか、猶又問ん、今日迄御身の居た所は、田の畔か、小川の岸か、家の軒塲か、若家ならば十六七の、パッチリとして目附、可愛らしき口元、白手拭眞深に、赤襷甲斐〳〵敷、桑の葉積入れたる籠を抱へて、戀かあらぬか、微音に唱歌しなから、朝夕出入る娘はあらざりしか、若又岸ならば、水の流に衣濯なから、幾度か我家の方を見返りつゝ、扨も昨日今日の、姑御の御機嫌の惡さ、あゝ爲れば斯、とすれば角、ホンに一日暮すも十日の心地す、此後斯くて十年廿年、マア其奉仕が我身てならうか、寧、イヤ〳〵、運命は我身の影とやら、何所で暮すも同じ事、同じ事なら名節の立ぬがまだしもの取所、辛抱しませう〳〵と、氣を取直すも、月に幾度の、傷しき妻は見ざりしか。白百合御身もし畔ならば、今は田植の眞盛り、朝は、山の端ほの〳〵の明初

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

る頃より、老人小年總がゝり、急ぎて、長閑に、牛も來る、馬も來る、子守もくれば、犬もくる、お午になれば、行廚も來る、先方の大町に餅苗一面に植付たるは、彼の酒嫌の八兵衛殿の奮發ならん。此方の小田に、早稲、中、後稲と植分たるは、彼の村使のお松寡婦の心盡しの果ならん。向ふの田より連節起れば、乃公も自慢の聲張上てやは。斯くて終日、夕月の影田の面に落る頃、夫々家に歸るなるへし。この後御身は、其所に手枕して、清田一里、螢火幾千、杜鵑の聲も自由自在に、まと幽邃の妙趣を極たる、境界なりしならん、何の因縁か今日はからず我家に來る、唯何事も忍べかし。去りとは美敷光澤なるよと、我餘念なく愛翫なしつゝ有しが、ふと打返して裏より見れば、是はしたり、是は思ひ懸ず、是は將何とせん。

何町何家の御孃樣、姿容貌は申に及ばず、學問技藝は當節がら、御孝行にて御慈悲深く、世話にくだけて、品格下らず、ホンに女の最上々、是非にくの誘に任せ、形ばかりの聞合せして、見合して黃道吉日、荷物夥しく迎へ入れたる花嫁御は、御耳が遠くて御目が近く、御體が重くて御口が輕からば、當世の聟君何として勘忍なるべき、先、月下氷人をと騷ぐなるべし。或は之にも似たらんか、今我持る白ゆりは、一見すれば最上の花、去りながら裏より見れば、葉のとくくに、小さき黑き穢き、蜍一面に犇々と付て其穢さチラと見るにも情なし。世上表裏の相異、甚敷ものとは心得つれど、汚れ少なき田園より今來たばかりの此花に、浮世の面影見ゆる事まことに不本意千萬なれど、靜に思へば是も道理よ。素此花は、白銅二ツに身をまかせたるものを。

巖本琴城先生

琴城範治先生、六月十六日俄かに長逝せらる。感冒の氣頓に革まり、肺炎に變じたるに由る。大阪朝日新聞に云く、

●巖本範治翁逝く　翁は舊鳥取藩士にして琴城と號し東京明治女學校長巖本善治氏の父なり明治十四年北垣國道男の京都府知事となるや同藩主の故を以て來京し文事を以て京都に一家を起し爾來二十餘年古學復興に貢獻したるもの少からず翁詩文に詳しく特に市内著名の碑石に其文章と揮

毫とを殘せるもの少からず近くは夫の北垣國道男銅像の銘の如きも翁の揮毫に成り又賀陽宮殿下に筆道の御指南申上げ傍柳馬場丸太町下る自宅に於ては古學の學舍を開き斯學の興隆に力めたりしが今回病を得て去十六日長逝し二十四日營葬せり。

六月廿四日、黑谷常光院に於て送葬の式を擧らる。導師燒香の後、左の弔文、挽詩等、朗讀せらる、

君資性溫厚にして最も文事に長ず、是を以て多年職を本府に奉じ、府治に盡瘁せられたる功績尠しとせず、殊に本市の事業たる琵琶湖疏水の事に關しては、終始斡旋、其參畫の功與て大なりとす、然るに今や高齡病を以て易簀せらる、哀悼何ぞ堪ん、乃ち葬儀に際し、聊一辭を叙し、以て君が幽魂を弔す。

京都市長　内貴甚三郎

故正八位嚴本範治君吊告詞　日本弘道會京都支會長谷鐵臣謹吊告　故正八位嚴本範治君之靈、嗚呼　君之罹肺炎也、僅數日、以本月十六日午後九時溘然長逝矣、哀哉　君甞賛我弘道會趣旨、入任講師也、不辭風雨、不厭寒暑、每會早進晚退、一日弗懈、以致苦力十年于此、其弘道之志、可謂壯、而其所論說、誠實懇切、能服人心、使　君而永存乎、吾道之行、將亦益擴弘、而今則亡矣　會員一同之哀嘆可勝言哉　抑　君之來寓我京都也、二十有余年、以文奉職、下惟授徒、終始無不出於道德之行、都下之人、誰不慕其流風、况我會員乎　君之終也二子善治捷治、致哀厚葬、稱有禮焉　君其可無遺憾矣、爰謹陳吊詞

從四位　谷　鐵　臣

哭嚴本君　待詔在京幾浹年、中興贊共劬勤、東山背月談時務、西峽探花避世氛、別后詩來音若玉、夢餘書至字如雲、不知今夕將何夕、一束生芻哭吊君　櫻井勤稱頓

上汲吊琴城嚴本翁　舒誼由來二十年、酬和雜數幾篇々、三春苦樂白雲境、百里同雖碧海天（與翁同遊月瀨數日、又同航横神間遭難于遠州灘、二句故云之）疎信只思健而老、訃音何圖去爲仙、興閑遺稿還空掩、忍讀温容顯字還　香雲片山正中辭草

敬啓　尊嚴範治君御事　長眠の趣新紙上にて承知致候、君には維新前よりの御昔交にて格別御懇意に有之候處近時は東西離隔平素御疎遠に打過居候、今般の御凶報に接し實に不勝痛悼之至、嘸々御愁傷之程奉察候、一封聊奉奠先は不取敢御悔み中上度如斯候敬白

嚴　谷　脩

此他、北垣國道男、小野湖山翁、日下部鳴鶴翁、大槻文彦博士、島田三郎君等の弔書略す

寄　書

有美君ノ美極經濟論ヲ讀ム

無　名　子

バイロンハ戀ニ醉ヘリ青柳氏ハ美ニ醉フ凡ソ醉者ノ言葉ハ常人ノソレヨリ卓絕ナルモノ多イ代リ又御話ニナラナイ了モ少ナカラズ

氏ノ美極經濟論畢ニ一篇ノ滑稽トシテ人ヲ笑ハス迄ニテ眞面目ナ意義アリトシテドーシテモ受取レヌ

私ハ西洋ノハ云フモサラナリ日本ノモ料理献立ト云フ程ノモノハ未ダ知ラヌ又婦人ガ之ニ對スル態度モ知ラヌ

然シ想像ニ訴フルニ誠ニ氏ノ申サルル如キコトモアルベシ

粗末ナル菓子ガ出レバ心置キナク手ヲ出シ上等ノガ出ヅレバ唯眺ムノミニ止マレト云フコトヲ私ハ客ノ遠慮ヨリ出ヅルナリト解釋致ス

丁度女ニ對シ一寸シタ無心ナレバ容易ニ云ヒ出サルケレド少シ重大ナ事ハ云ヒ兼ヌルト同樣ナリ

如何ニ食物ガ美々シク製セラレ飾リ立テラレタトテ決シテ食慾ヲ滿足セシムルコトハ出來ヌ――尤モ美的快感ハ食慾ノ感情ニ打チ勝ツコトガアルカハ知ラ子ド――若シ其ノ人ガ空腹ナラバ益食慾ヲ惹起セシメ垂涎自ラ禁スル能ハサルガ通例トス

食物ヲ見ルノミニテ飽クコトヲ知リ玉フハ金箔ニテ化粧サレル佛様ヨリ外ニアラザルベシ

園藝、彫刻、繪畫、音樂、演劇、所謂美術ト稱セラルヽモノハ多クハ始メヨリ人ノ想像ヲ起サシメンガ爲メニ造ラレタルモノナリ

想像ハ氏ノ盲ノ如ク經濟ノ助ケニナルコトアラン然シ想像ハ單ニ美術ノ領地ニノミ住スルモノデナク科學的想像ノ必用ナルコト科學者發明家ナドノ等シク認ムル所ナリ想像ハ美術ノ專有物ニハアラズ

氏ノ述ベラルヽガ如キ薄弱ナル理由ニテ美ノ極ニ經濟ト一致スルト云フコトガ出來ルナラバ科學モ工藝モ政治モ道德モ其他一切萬有悉ク經濟ニ一致スルト云フテ差支ヘナシ

何モ美ノミガ經濟ニ一致スルトテ美極經濟論ヲ殊更ニ云ヒ出ス必用ハアルマイ美モ萬有ノ一部ナリ經濟モ萬有ノ一部ナリサレバ美ト經濟トガ一致スルコトハ往々アロー又之ト同時ニ然ラザル塲合モ隨分アル經濟ニ一致スルカラ美ト云フ議デハ決シテナヒ美ハ超然ト美テアル別言セバ美ト經濟ト一致スルハ偶然デアル一致セザルベカラザル必然ノ理論アルニ非ラズ

全體眞ト善ト美ハ仲ノヨキ姉妹デアル而モ時トシテハ美ハ同胞タル眞ヤ善ト一致セザルコトアリ況ンヤアカノ他人ノ經濟ニ於テヲヤ

古物ガ美術品トセラルヽハ其ノ物ガ永キ時間ニ耐ヘシカヲ耐美スルト及ビ史的感情ノ加ハルニヨルナルコト普通美學者ノ唱フル所ナリ

ニ何モ廢物利用ノ爲メニワザハザ神様ガ古物ニ美ヲ與ヘタモノデハナイ

若シ廢物利用ノ爲メトナラバ古物ニ限ラズ無益ナモノハ悉ク美ノ性質ヲ與ヘ子バナラヌ

聞ナラク御多福トハ今デコソ醜女ノ代名詞ナレ千年以前藤原氏時代ニハ御多福トハ美人ノ代名詞ナリシナリト

見ヨ其ノ時代ノ人物畫ヲ

女性トシ云ヘバ悉ク是レ豐頰、長髮ノ美人ニ非ラザルハナキニアラズヤ

女ハ髮ノ長カランコソ人ノ目ダツベカンメレト生臭坊主否ナ粹ナ御出家ノ兼好法師ハ云ヘリ實ニヤ其ノ時代ニハ黑髮ハ女子ノ生命ニシテ長ガケレバ長キ程美人ナリシナリ

我レ靑柳氏ニ聞ヒタキコトアリ

チキナハ丈ニアマランニ女子心ノツカ子テイハヌ黑髮ハ氏ノ所謂經濟ヨリ果シテ無用ノ長物ニ非ラズヤ否ヤ

美人ハ色ガ白イカラ白粉ガイラヌ依テ亦コレ經濟ニ合セリト靑柳氏ハ申サルヽ一回ノ化粧ニ白粉料ヤ口紅料ガ三錢入ルカ五錢入ルカ知ラ子ド兎ニ角使用スレバソレダケ不經濟ニテ使用セザレバソレダケ經濟ナルハ確カナリ

然シ美人ノ美タル原因ハ白粉ガイラヌカラデハナク色ガ白イカラ白粉ガイラヌ迄デアル

サレバ是ノ點ニ於テ美ガ經濟ニ一致スルト云フコトハ出來ナヒ否ナ反對ニ云ヒタクナル

誰人モ醜クナラント思フテ白粉ヲ附ルハナシ少シデモヨリ美シク見ラレン思ヘレント欲スレバナリ

即チ美ヲ欲スルカラ白粉ヲ附ル白粉ヲ附ルカラコレダケ國家ハ損失ヲ蒙ルツマリ國家ハ美ノ爲メニ損失ヲ蒙ルト云フテ宜シイ

要スルニ靑柳氏ノ着眼ハ甚ダ面白ヒケレド所論ハ或ハ附會ナル點ナキニアラズヤト思ハルヽ

予ヲシテ再ヒクリカヘサシメヨ

バイロンハ戀ニ醉ヘリ

靑柳氏ハ美ニ醉フ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女子實學園創業義捐金募集發起人

女子實學園ハ去年六月初メテ世上ノ有志ニ賛助ヲ請ヒタリ。然ルニ左記ノ貴婦人ハ直チニ起ツテ之ニ應シ、六月下旬東京音樂學校ニ於テ前後二日慈善音樂會ヲ催ホシ、收入金圓ヲ寄セテ、寄宿舍及ヒ敷地ノ購入ニ便セラレタリ右發起人ノ芳名ハ如左。

公爵岩倉具定君夫人　岩倉久子
公爵一條實輝君夫人　一條悅子
伊澤修二君夫人　伊澤千代子
原六郎君夫人　原富子
原亮三郎君夫人　原禮子
濱田玄達君夫人　濱田すて子
堀江半兵衛君夫人　堀江てい子
穗積陳重君夫人　穗積うた子
穗積八束君夫人　穗積まつ子
保利眞直君夫人　保利久子
豐川良平君夫人　豐川やす子
伯爵戸田氏共君夫人　戸田極子
伯爵大隈重信君夫人　大隈綾子
侯爵大山巖君夫人　大山捨松子
子爵岡部長職君夫人　岡部坻子
門野幾之進君夫人　門野駿子
子爵香川敬三君夫人　香川須磨子
片山東熊君夫人　片山照子
高木兼寛君夫人　高木富子
棚橋絢子
子爵田中光顯君夫人　田中伊與子
武田錦子
團琢磨君夫人　團よし子
相馬永胤君夫人　相馬遂子
津田梅子
侯爵鍋島直大君夫人　鍋島榮子
日下義雄君夫人　日下清子
山本達雄君夫人　山本たほ子
矢島楫子
安井哲子
子爵松平直平君夫人　松平久子
男爵松平正直君夫人　松平須磨子
子爵松前修廣君夫人　松前藤子
公爵近衛篤麿君夫人　近衛貞子
後閑菊野子
阿部泰藏君夫人　阿部優子
淺野惣一郎君夫人　淺野さく子
佐藤進君夫人　佐藤靜子
佐方鎭子
佐々木政吉君夫人　佐々木よし子
侯爵木戸孝正君夫人　木戸すゑ子
清藤秋子
三輪田眞佐子
三井三郎助君夫人　三井すて子
子爵三島彌太郎君夫人　三島かれ子
島田三郎君夫人　島田のぶ子
公爵島津忠濟君夫人　島津田鶴子
下田歌子
進十六君夫人　進道子
森村市左衛門君夫人　森村菊子
公爵毛利元昭君母堂　毛利安子
男爵千家尊福君夫人　千家俊子

女學雜誌大賣捌　東京 東京堂　東京 四勉強堂

明治三十六年七月十日印刷
明治三十六年七月十日發行

發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
發行所　東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地　女學雜誌社（電話番町千一番）
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍（電話新橋十八番）

女學雜誌第五百十七號
明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可
（明治卅六年七月十五日發行）

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第五百十七號

（明治卅六年七月十五日發行）

明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY